吉原新話

泉鏡花

一

表二階の次の六畳、階子段の上り口、余り高くない天井で、電燈を捻ってフッと消すと……居合わす十二三人が、皆影法師。

仲の町も水道尻に近い、蔦屋という引手茶屋で。間も無く大引けの鉄棒が廻ろうという時分であった。

閏のあった年で、旧暦の月が後れたせいか、陽気が不順か、梅雨の上りが長引いて、七月の末だというのに、畳も壁もじめじめする。

もっともこの日、雲は拭って、むらむらと切れたが、

しかしほんとうに霽（あが）ったのでは無いらしい。どうやら底にまだ雨気（あまき）がありそうで、悪く蒸す……生干（なまび）の足袋に火熨斗（ひのし）を当てて穿（は）くようで、不気味に暑い中に冷（ひや）りとする。

気候はとにかく、八畳の表座敷へ、人数が十人の上であるから、縁の障子は通し四枚とも宵の内から明放したが、夜桜、仁和加（にわか）の時とは違う、分けて近頃のさびれ方。仲の町でもこの大一座は目に立つ処へ、浅間（あさま）、端近（はしぢか）、戸外（おもて）へ人立ちは、嬉しがらないのを知って、家（うち）の姉御（あねご）が気を着けて、簾（すだれ）という処を、幕にした。廂（ひさし）へ張って、浅葱（あさぎ）に紺の熨斗（のし）進上、朱鷺色（ときいろ）鹿の子の

ふくろ字で、うめという名が一絞（ひとしぼり）。紅（くれない）の括紐（くくりひも）、襷（たすき）か何ぞ、間に合わせに、ト風入れに掲げたのが、横に流れて、地（じ）が縮緬（ちりめん）の媚（なまめ）かしく、朧（おぼろ）に颯（さっ）と紅梅の友染を捌（さば）いたような。

この名は数年前、まだ少（わか）くって見番の札を引いたが、家（うち）の抱妓（かかえ）で人に知られた、梅次というのに、何か催（もよおし）のあった節、贔屓（ひいき）の贈った後幕（うしろまく）が、染返しの掻巻（かいまき）にもならないで、長持の底に残ったのを、間に合わせに用いたのである。

端唄（はうた）の題に出されたのも、十年近く以前であるから。見たばかりで、野路（のじ）の樹とも垣根の枝とも、誰も気の

着いたものはなかったが、初め座の定まった処へ、お才という内の姉御が、お茶聞しめせ、と持って出て、梅干も候ぞ。

「いかがですか、甘露梅。」

と、今めかしく註を入れたは、年紀の少い、学生も交ったためで。

「お珍らしくもありませんが、もう古いんですよ、私のように。」

と笑いながら、

「民さん、」

と、当夜の幹事の附添いで居た、佐川民弥という、

ある雑誌の記者を、ちょいと見て、

「あの妓(こ)なんか、手伝ったのがまだそのままなんです。召あがれ。」と済まして言う。

様子を知った二三人が、ふとこれで気が着いた。そして、言合わせたように民弥を見た。

もっとも、そうした年紀(とし)ではなし、今頃はもう左衛門で、女房の実の名も忘れているほどであるから、民弥は何の気も無さそうに、

「いや、御馳走(ごちそう)。」

時に敷居の外の、その長(なが)六畳の、成りたけ暗そうな壁の処へ、紅入友染(べにいりゆうぜん)の薄いお太鼓を押着(おっつ)けて、小さく

なったが、顔の明(あかる)い、眉の判然(はっきり)した、ふっくり結綿(ゆいわた)に緋(ひ)の角絞(つのしぼ)りで、柄も中形も大きいが、お三輪といって今年が七(しち)、年よりはまだ仇気(あどけ)ない、このお才の娘分。吉野町(よしのちょう)辺の裁縫(おしごと)の師匠へ行(ゆ)くのが、今日は特別、平時(いつも)と違って、途中の金貸の軒に居る、馴染(なじみ)の鸚鵡(おうむ)の前へも立たず……黙って奥山の活動写真へも外(そ)れないで、早めに帰って来て、紫の包も解かずに、……

「道理で雨が霽(あが)ったよ。」

嬉々(いそいそ)客設けの手伝いした、その――

二

お三輪がちょうど、そうやって晴がましそうに茶を注（つ）いでいた処。——甘露梅の今のを聞くと、はッとしたらしく、顔を据えたが、拗（す）ねたという身で土瓶をトン。

「才（さあ）ちゃん。」

と背後（うしろ）からお才を呼んで、前垂（まえだれ）の端はきりりとしながら、褄（つま）の媚（なま）めく白い素足で、畳触（たたみざわ）りを、ちと荒く、ふいと座を起（た）ったものである。

待遇（あいしらい）に二つ三つ、続けて話掛けていたお才が、唐突（だしぬけ）に腰を折られて、

「あいよ。」

で、軽く衣紋を圧え、瘦せた膝で振り返ると、娘はもう、肩のあたりまで、階子段に白地の中形を沈めていた。

「ちょっと、」……と手繰って言ったと思うと、結綿がもう階下へ。

「何だい。」とお才は、いけぞんざい。階子段の欄干から俯向けに覗いたが、そこから目薬は注せなそうで、急いで降りた。

「何だねえ。」

「才ちゃんや。」

と段の下の六畳の、長火鉢の前に立ったまま、ぱっちりとした目許（めもと）と、可愛らしい口許で、引着けるようにして、

「何だじゃないわ。お気を着けなさいよ。梅次姉（ねえ）さんの事なんか言って、兄さんが他（ほか）の方に極（きまり）が悪いわ。」

「ううん。」と色気の無い頷（うなず）き方。

「そうだっけ。まあ、可（い）いやね。」

「可（よ）かない事よ……私は困っちまう。」

「何だねえ、高慢な。」

「高慢じゃないわ。そして、先生と云うものよ。」

「誰をさ。」

「皆さんをさ、先生とか、あの、貴方（あなた）とか、そうじゃなくって。誰方（どなた）も身分のある方なのよ。」

「そうかねえ。」

「そうかじゃありませんよ。才ちゃんてば。……それをさ、民さんだの、お前（ま）はんだのって……私は聞いていてはらはらするわ、お気を注（つ）けなさいなね。」

「ああ、そうだね、」

と納得はしたものの、まだ何（なん）だか、不心服らしい顔色（かおつき）で、

「だって可（い）いやね、皆さんが、お化（ばけ）の御連中なんだから。」

習慣(ならわし)で調子が高い、ごく内(ない)の話のつもりが、処々、どころでない。半ば以上は二階へ届く。

一同くすくすと笑った。

民弥は苦笑したのである。

その時、梅次の名も聞えたので、いつの間にか、縁の幕の仮名の意味が、誰言うとなく自然(おのず)と通じて、投遣(なげや)りな投放(むすびばな)しに、中を結んだ、紅(べに)、浅葱(あさぎ)の細い色さえ、床の間の籠(かご)に投込んだ、白い常夏(とこなつ)の花とともに、ものは言わぬが談話(はなし)の席へ、仄(ほのか)な俤(おもかげ)に立っていた。

が、電燈(でんき)を消すと、たちまち鼠色の濃い雲が、ぱっと落ちて、廂(ひさし)から欄干(てすり)を掛けて、引包(ひっつつ)んだようになっ

た。
夜も更けたり、座の趣は変ったのである。
かねて、こうした時の心を得て、壁際に一台、幾年にも、ついぞ使った事はあるまい、艶(つや)の無い、くすぶった燭台(しょくだい)の用意はしてあったが、わざと消したくらいで、蠟燭(ろうそく)にも及ぶまい、と形(かた)だけも持出さず——所帯構わぬのが、衣紋竹(えもんだけ)の替りにして、夏羽織をふわりと掛けておいた人がある——そのままになっている。
灯(あかり)無しで、どす暗い壁に附着(くッつ)いた件(くだん)の形は、蝦蟇(がま)の口から吹出す靄(もや)が、むらむらとそこで蹲踞(うずくま)ったようで、居合わす人数の姿より、羽織の方が人らしい。そ

して、……どこを漏れて来る燈（ともしび）の加減やら、絽（ろ）の縞（しま）の袂（たもと）を透いて、蛍を一包（ひとつつみ）にしたほどの、薄ら蒼（あお）い、ぶよぶよとした取留（とりとめ）の無い影が透く。

三

大方はそれが、張出し幕の縫目を漏れて茫（ぼう）と座敷へ映るのであろう……と思う。欄干下（らんかんした）の廂（ひさし）と擦れ擦れな戸外（おもて）に、蒼白い瓦斯（がす）が一基（ひともと）、大門口（おおもんぐち）から仲の町にずらりと並んだ中の、一番末の街燈がある。

時々光を、幅広く迸（ほとば）しらして、濶（かッ）と明るくなると、

燭台(しょくだい)に引掛(ひっか)けた羽織の袂が、すっと映る。そのかわり、じっと沈んで暗くなると、紺の縦縞が消々(きえぎえ)になる。

座中は目で探って、やっと一人の膝、誰かの胸、別のまた頬(ほお)のあたり、片袖(かたそで)などが、風で吹溜(ふきたま)ったように、断々(きれぎれ)に仄(ほのか)に見える。間を隔てたほどそれがかえって濃い、つい隣合ったのなどは、真暗(まっくら)でまるで姿が無い。

ふと鼠色の長い影が、幕を斜違(はすっか)いに飜々(ひらひら)と伝わったり……円さ六尺余りの大きな頭が、ぬいと、天井に被(かぶ)さりなどした。

「今、起(た)ちなすったのは魯智深(ろちしん)さんだね。」

と主(ぬし)は分らず声を懸ける。

「いや、私(わし)は胡坐(あぐら)掻(か)いています、どっしりとな。」
とわざと云う。……描ける花和尚(かおしょう)さながらの大入道、この人ばかりは太ツ腹の、あぶらぼてりで、宵からの大肌脱(おおはだぬぎ)。絶えずはたはたと鳴らす団扇(うちわ)［＃「団扇」は底本では「団扉」］づかい、ぐいと、抱えて抜かないばかり、柱に、えいとこさで凭懸(よりかか)る、と畳半畳だぶだぶと腰の周囲(まわり)に隠れる形体(ぎょうてい)。けれども有名な琴の師匠で、芸は嬉しい。紺地の素袍(すおう)に、烏帽子(えぼし)を着けて、十三絃(げん)に端然(ちゃん)と直ると、松の姿に霞(かすみ)が懸(かか)って、琴爪(ことづめ)の千鳥が啼(な)く。
「天井を御覧なさい、変なものが通ります。」

「厭(いや)ですね。」と優しい声。

当夜、二人ばかり婦人も見えた。

これは、百物語をしたのである。――

会をここで開いたのは、わざと引手茶屋を選んだ次第では無かった。

「ちっと変った処で、好事(ものずき)に過ぎると云う方もございましょう。何しろ片寄り過ぎますんで。しかし実は席を極(き)めるのに困りました。

何しろこの百物語……怪談の会に限って、半夜は中途で不可(いけ)ません。夜が更けるに従って……というのですから、御一味を下さる方も、かねて徹夜というお覚

悟です。処で、宵から一晩の註文で、いや、随分方々へ当って見ました。

料理屋じゃ、のっけから対手（あいて）にならず、待合申すまでも無い、辞退。席貸をと思いましたが、やっぱり夜一夜（よっぴて）じゃ引退（ひきさが）るんです。第一、人数が二十人近くで、夜明しと来ては、成程、ちょっとどこといって当りが着きません。こりゃ旅籠屋（はたごや）だ、と考えました。

これなら大丈夫、と極めた事にすると、どういたして、まるで帳場で寄せつけません、無理もございますまい。旅籠屋は人の寝る処を、起きていて饒舌（しゃべ）ろうというんです。傍（はた）が御迷惑をなさる、とこの方を関所破

りに扱います、困りました。

寺方はちょっと聞くと可(い)いようで、億劫(おっくう)ですし、教会へ持込めば叱られます。離れた処で寮なんぞ借りられない事もありませんが――この中にはその時も御一所で、様子を御存じの方もお見えになります、昨年の盆時分、向島の或(ある)別荘で、一会催した事があるんです。

飛んだ騒ぎで、その筋に御心配を掛けたんです。多人数一室へ閉籠(とじこも)って、徹夜で、密々(ひそひそ)と話をするのが、寂(しん)とした人通(ひとどおり)の無い、樹林(きばやし)の中じゃ、その筈(はず)でしょう。

お引受け申して、こりゃ思懸けない、と相応に苦労をしました揚句(あげく)、まず……昔の懺悔(ざんげ)をしますような取

詰め方で、ここを頼んだのでございます。

　言訳を申すじゃありませんが、以前だとて、さして馴染(なじみ)も無い家(うち)が、快く承わってくれまして、どうやらお間に合わせます事が出来ました。

　ちと唐突(だしぬけ)に変った誂(あつら)えだもんですから、話の会だと言いますと、

（はあ、おはなの……）なんてな、此家(ここ)の姉御(あねご)が早合点(はやがってん)で……」

　と笑いながら幹事が最初挨拶(あいさつ)した、——それは、神田辺の沢岡という、雑貨店の好事(ものずき)な主人であった。

四

連中には新聞記者も交（まじ）ったり、文学者、美術家、彫刻家、音楽家、——またそうした商人（あきんど）もあり、久しく美学を研究して、近頃欧洲から帰朝した、子爵（ししゃく）が一人。女性（にょしょう）というのも、世に聞えて、……家（うち）のお三輪は、婦人何々などの雑誌で、写真も見れば、名も読んで知った方。

で、こんな場所は、何の見物にも、つい足踏（あしぶみ）をした事の無いのが多い。が、その人たちも、誰も会場が吉原というのを厭（いと）わず、中にはかえって土地に興味（おもしろみ）を

持って、到着帳に記いたのもある。
「吉野橋で電車を下りますまでは無事だったんですよ。」
とそれについて婦人の一人、浜谷蘭子が言出すと、可恐く気の早いのが居て、
「ええ、何か出ましたかな。」
「まさか、」
と手巾をちょっと口に当てて、瞼をほんのりと笑顔になって、
「お化が貴下、わざわざ迎いに出はしませんよ。方角が分りませんもの。……交番がござんしたから、——

伺いますが、水道尻はどう参りましょうかって聞いたんです。巡査(おまわり)さんが真面目(まじめ)な顔をして、（水道はその四角(よつかど)の処にあります。）って丁寧に教えられて、困ったんです。」

「水を飲みたくって、それで尋ねたんだと思ったんでしょうよ。」とその連(つれ)だったもう一人の、明座種子(あかざたねこ)が意気な姿で、そして膝に手をきちんとして言う。

「私もはじめてです。両側はそれでも画(え)に描いたようですな。」と岩木という洋画家が応じた。

「御同然で、私はそれでも、首尾よく間違えずに来たですよ。北廓(ほっかく)だというから、何でも北へ北へと見当を

着けるつもりで、宅から磁石を用意に及んだものです。」と云う堀子爵が、ぞんざいな浴衣がけの、ちょっきり結びの兵児帯（へこおび）に搦（から）んだ黄金鎖（きんぐさり）には、磁石が着いていも何にもせぬ。

花和尚がその諸膚脱（もろはだぬぎ）の脇の下を、自分の手で擽（くすぐ）るように、ぐいと緊（し）めて腹を揺（ゆす）った。

「そろそろ怪談になりますわ。」

確か、その時分であった。壇の上口（あがりくち）に気勢（けはい）がすると、潰（つぶ）しの島田が糶上（せりあが）ったように、欄干（てすり）隠れに、少（わか）いのが密（そっ）と覗込（のぞきこ）んで、

「あら、可厭（いや）だ。」

と一つ婀娜(あだ)な声を、きらりと銀の平打(ひらうち)に搦めて投込んだ、と思うが疾(はや)いが、ばたばたと階下(した)へ駆下りたが、

「噓、居やしないわ。」と高い調子。

二言、三言、続いて花やかに笑ったのが聞えた。

駒下駄(こまげた)の音が三つ四つ。

「覚えていらっしゃいよ。」

「お喧(やかま)しゅう……」

魯智深は、ずかずかと座を起(た)って、のそりと欄干(てすり)に腹を持たせて、幕を透かして通(とおり)を瞰下(みおろ)し、

「やあ、鮮麗(あざやか)なり、おらが姉(ねえ)さん三人ござる。」

「君、君、その異形(いぎょう)なのを空中へ顕(あらわ)すと、可哀相(かわいそう)に目

を廻すよ。」と言いながら、一人が、下からまた差覗(さしのぞ)いた。

「家(うち)の娘かね。」

と子爵が訊(き)く。差向いに居た民弥が、

「いいえ。」

「何です。」

「やっぱり通り魔の類(たぐい)でしょうな。」

「しかし、不意だからちょっと驚きましたよ。」とその洋画家が……ちょうど俯向(うつむ)いて巻莨(まきたばこ)をつけていた処、不意を食(くら)った眼鏡が晃(きら)つく。

当夜の幹事が苦笑いして、

「近所の若い妓(こ)どもです……御存じの立旦形(たておやま)が一人、今夜来ます筈(はず)でしたが、急用で伊勢へ参って欠席しました。階下(した)で担いだんでしょう。密(そっ)と覗(のぞ)きに……」

「道理こそ。」

「（あら可厭(いや)だ）は酷(ひど)いな。」

五

「おおおお、三人が手を曳(ひき)ッこで歩行(ある)いて行(ゆ)きます……仲の町も人通りが少いなあ、どうじゃろう、景気の悪い。ちらりほらりで軒行燈(のきあんどう)に影が映る、——海老屋(えびや)

の表は真暗だ。

ああ、揃って大時計の前へ立停った……いや三階でちょっとお辞儀をするわ。薄暗い処へ朦朧と胸高な扱帯か何かで、寂しそうに露れたのが、しょんぼりと空から瞰下ろしているらしい。」

と円い腕を、欄干が挫げそうにのッしと支いて、魯智深の腹がたぶりと乗出す……

「どこだ、どれ、」

と向返る子爵の頭へ、さそくに、ずずんと身を返したが、その割に気の軽さ。突然見越入道で、蔽われ掛って、

「ももんがあ！　はッはッはッ。」

「失礼、只今(ただいま)は、」

と、お三輪が湯を注(さ)しに来合わせて、特に婦人客(おんなきゃく)の背後(うしろ)へ来て、極(きまり)の悪そうに手を支(つ)いた。

「才(さあ)ちゃんが、わけが分らなくって不可(いけ)ません、芸者衆(しゅ)なんか二階へ上げまして。」

と言(ことば)も極(きま)って含羞(はにか)んだ、紅(あか)い手絡(てがら)のしおらしさ。一人の婦人が斜めに振向き、手に持ったのをそのままに、撫子(なでしこ)に映(さ)す扇の影。

「いいえ。そして……ちとお遊びなさいませ。」

「はい、あの、後にどうぞ。」

と嬉しそうに莞爾（にっこり）しながら、
「あの、明る過ぎましたら電燈（でんき）をお消し下さいましな、燭台（しょくだい）をそこへ出しておきました。」
と幹事に言う。雑貨店主が、
「難有（ありがと）う、よくお心の着きます事で。」
「あら、可厭（いや）だ。」……と蓮葉（はすは）になる。
「二ツ、」
と一人高らかに呼（よば）わった。……芸者のと、（可厭だ）が二度目、という意味だけれども、娘には気が着かぬ。
「え？」
民弥が静（しずか）に振返って、

「三輪（みい）ちゃんの年紀（とし）は二十（はたち）かって？」
「あら、可厭だ。」
「三つ！」
「じゃ、三十かってさ。」と雑貨店主が莞爾（にっこり）する。
「知らないわ。」
「まあまあ、可（い）いわ、お話しなさい。」と花和尚、この時、のさのさと座に戻る。
「お茶を入れかえて参ります。」
と、もう階子（はしご）の口。ちょっと留まって、
「そして才ちゃんに、御馳走をさせましょうね。兄さん、（吃驚（びっくり）したように）……あの、先生。」

「心得たもんですな。」と洋画家が、煙草(たばこ)の濃い烟(けむり)の中で。

「貴女方(あなたがた)の御庇(おかげ)です……敬意を表して、よく小老実(こまめ)に働きますよ。」と民弥が婦人だちを見向いて云う。と二人が一所に、言合わせたように美しく莞爾(にっこり)して、

「どういたしまして。」

「いや、事実ですよ……家はこんなでも、裁縫(おはり)に行(ゆ)く先方(さき)に、また、それぞれ朋(とも)だちがありましてな、それ引手茶屋の娘でも、大分工合(ぐあい)が違って来ました。どうして滅多に客の世話なぞするのじゃありませんや。貴女がたの顔まで、ちゃんと心得ていて、先刻(さっき)も手前

ちょっと階下(した)へ立違いますと、あちらが、浜谷さんで、こちらが、明座さんでしょう、なんてそう言います。

廓(くるわ)がはじめてだってお言いなさったのを聞いたと見えて、御見物なさいませんか、お供をして、そこいら、御案内をしましょう、と手前にそう言っていましたっけ。」と団扇(うちわ)を構えて雑貨店主。

「そう、まあ……見て来ましょうか。」

「ねえ。」と顔を見合わせた。

子爵が頭(かぶり)を振りながら、

「お止(よ)しなさい、お揃いじや、女郎(じょろ)が口惜(くや)しがるでしょう、罪だ。」

六

「なぜですか。」

「新橋、柳橋と見えるでしょう。」

「あら、可厭（いや）だ。」

「四つ、」

と今度は、魯智深が、透かさず指を立てて、ずいと揚げた。

すべてがこの調子で、間へ二ツ三ツずつ各自（めいめい）の怪談が挟まる中へ、木皿に割箸（わりばし）をざっくり揃えて、夜通し

のその用意が、こうした連中に幕の内でもあるまい、と階下で気を着けたか茶飯の結びに、はんぺんと菜のひたし。……ある大籬の寮が根岸にある、その畠に造ったのを掘たてだというはしりの新芋。これだけはお才が自慢で、すじ、蒟蒻などと煮込みのおでんを丼へ。目立たないように一銚子附いて出ると、見ただけでも一口呑めそう……梅次の幕を正面へ、仲の町が夜の舞台で、楽屋の中入といった様子で、下戸までもつい一口飲る。

八畳一杯赫と陽気で、ちょうどその時分に、中びけの鉄棒が、近くから遠くへ、次第に幽かになって廻っ

たが、その音の身に染みたは、浦里時代の事であろう。誰の胸へも響かぬ。……もっとも話好きな人ばかりが集ったから、その方へ気が入って、酔ったものは一人も無い。が、どうして勢（いきおい）がこんなであるから、立続けに死霊（しりょう）、怨霊（おんりょう）、生霊（いきりょう）まで、まざまざと顕（あらわ）れても、凄（すご）い可恐（こわ）いはまだな事――汐時（しおどき）に颯（さっ）と支度を引いて、煙草盆（たばこぼん）の巻莨（まきたばこ）の吸殻が一度綺麗（きれい）に片附く時、蚊遣香（かやりこう）もばったり消えて、畳の目も初夜過ぎの陰気に白く光るのさえ、――寂しいとも思われぬ。

（あら可厭だ）……のそれでは無い。百万遍の数取りのように、一同ぐるりと輪になって、じりじりと膝を

寄せると、千倉ヶ沖の海坊主、花和尚の大きな影が幕をはびこるのを張合いにして、がんばり入道、ずばい坊、鬼火、怪火（あやしび）、陰火の数々。月夜の白張（しらはり）、宙釣りの丸行燈（まるあんどう）、九本の蠟燭（ろうそく）、四ツ目の提灯（ちょうちん）、蛇塚を走る稲妻、一軒家の棟を転がる人魂（ひとだま）、狼の口の弓張月、古戦場の火矢の幻。

怨念（おんねん）は大鰻（おおうなぎ）、古鯰（ふるなまず）、太岩魚（ふといわな）、化ける鳥は鷺（さぎ）、山鳥。声は梟（ふくろ）、山伏の吹く貝、磔場（はりつけば）の夜半（よわ）の竹法螺（たけぼら）、焼跡の呻唸声（うめきごえ）。

蛇ヶ窪の非常汽笛、箒川（ほうきがわ）の悲鳴などは、一座にまさしく聞いた人があって、その響（ひびき）も口から伝わる。……

…按摩（あんま）の白眼（しろめ）、癩坊（かったい）の鼻、婆々（ばばあ）の逆眉毛（さかまつげ）。気味の悪いのは、三本指、一本脚。

厠（かわや）を覗（のぞ）く尼も出れば、藪（やぶ）に蹲（しゃが）む癖の下女も出た。米屋の縄暖簾（なわのれん）を擦れ擦れに消える蒼（あお）い女房、矢絣（やがすり）の膝ばかりで搔巻（かいまき）の上から圧（お）す、顔の見えない番町のお嬢さん。干すと窄（すぼ）まる木場辺の渋蛇の目、死んだ頭（かしら）の火事見舞は、ついおもだか屋にあった事。品川沖の姪の影、真乳（まっち）の渡（わたし）の朧蓑（おぼろみの）、鰻搔（うなぎかき）の蝮笊（まむしざる）。

犬神、蛇を飼う婦（おんな）、蟇（ひきがえる）を抱いて寝る娘、鼈（すっぽん）の首を集める坊主、狐憑（きつねつき）、猿小僧、骨なし、……猫屋敷。で、この猫について、座の一人が、かってその家に

飼った三毛で、年久しく十四五年を経た牝(めす)が、置炬燵(おきごたつ)の上で長々と寝て、密(そっ)と薄目を睜(みひら)くと、そこにうとうとしていた老人(としより)の顔を伺った、と思えば、張裂けるような大欠伸(おおあくび)を一つして、

（お、お、しんど）と言って、のさりと立った。

　話した発奮(はずみ)に、あたかもこの八畳と次の長六畳との仕切が柱で、ずッと壁で、壁と壁との間が階子段(はしごだん)と向合(むかいあわ)せに櫺子窓(れんじまど)のように見える、が、直ぐに隣家(となり)の車屋の屋根へ続いた物干。一跨(ひとまた)ぎで出られる。……水道尻まで家続きだけれども、裏手、廂合(ひあわい)が連(つらな)るばかり、近間(ちかま)に一ツも明(あかり)が見えぬ、陽気な座敷に、その窓ばか

りが、はじめから妙に陰気で、電燈（でんき）の光も、いくらかずつそこへ吸取られそうな気勢（けはい）がしていた。

その物干の上と思う処で……

七

「ゴロロロロ、」

と濁った、太い、変に地響きのする声がした、——

不思議は無い。猫が鳴いた事は、誰の耳にも聞えたが、場合が場合で、一同が言合わせたごとく、その四角な、大きな、真暗（まっくら）な穴の、遥（はる）かな底は、上野天王寺の森の

黒雲が灰色の空に浸(にじ)んで湧上(わきあが)る、窓を見た。
フト寂しい顔をしたのもあるし、苦笑いをしたのもあり、中にはピクリと肩を動かした人もあった。
「三輪(みい)ちゃん、内の猫かい。」
民弥は、その途端に、ひたと身を寄せたお三輪に訊(たず)ねた。……遠慮をしながら、成(なる)たけこの男の傍(そば)に居て、先刻(さっき)から人々の談話(はなし)の、凄(すご)く可恐(おそろし)い処というと、密(そっ)と縋(すが)り縋り聞いていたのである。
「いいえ、内の猫は、この間死にました。」
「死んだ？」
「ええ、どこの猫でしょう……近所のは、皆(みんな)たま（猫

の名）のお友達で、私は声を知ってるんですけれど…
…可厭（いや）な声ね。きっと野良猫よ。」
それと極（きま）っては、内所（ないしょ）の飼猫でも、遊女（おいらん）の秘蔵でも、遣手（やりて）の懐児（ふところご）でも、町内の三毛、斑（ぶち）でも、何のと引手茶屋の娘の勢（いきおい）。お三輪は気軽に衝（つ）と立って、襟脚を白々と、結綿（ゆいわた）の赤い手絡（てがら）を障子の桟（さん）へ浮出したように窓を覗（のぞ）いた。
「遁（に）げてよ。もう居やしませんわ。」
一人の婦人が、はらはらと後毛（おくれげ）のかかった顔で、
「姉（ねえ）さん。」
「はーい、」と、呼ばれたのを嬉しそうな返事をする。

「閉めていらっしゃいな。」

で、蓮葉（はすは）にぴたり。

後に話合うと、階下（した）へ用達しになど、座を起（た）って通る時、その窓の前へ行（ゆ）くと、希代（きたい）にヒヤリとして風が冷い。処で、何心なく障子をスーツと閉めて行（ゆ）く、……帰りがけに見るとさらりと開（あ）いている。が、誰もそこへ坐るのでは無いから、そのままにして座に戻る。また別人が立つ、やっぱりぞっとするから閉めて行（ゆ）く、帰りがけにはちゃんと開けてあった。それを見た人は色々で、細目の時もあり、七八分目の時もあり、開放しの時もあった、と言う。

さて、そのときまでは、言ったごとく、陽気立って、何が出ても、ものが身に染むとまでには至らなかったが、物語の猫が物干の声になってから、各自（おのおの）言合わせたように、膝が固まった。

時々灰吹の音も、一ツ鉦（がね）のようにカーンと鳴って、寂然（しん）と耳に着く。……

気合が更（あらた）まると、畳もかっと広くなって、向合（むかいあ）い、隣同士、ばらばらと開けて、間（あわい）が隔るように思われるので、なおひしひしと額を寄せる。

「消そうか、」

「大人気ないが面白い。」

ここで電燈（でんき）が消えたのである。――

「案外身に染みて参りました。人数の多過ぎなせいもありましょう。わざと灯（あかり）を消したり、行燈（あんどう）に変えたりしますと、どうもちと趣向めいて、バッタリ機巧（からくり）を遣（や）るようで一向潮が乗りません。

前（せん）の向島の大連の時で、その経験がありますから、今夜は一番（ひとつ）、明晃々（あかりこうこう）とさして、どうせ顕（あらわ）れるものなら真昼間（まっぴるま）おいでなさい、明白で可（い）い、と皆さんとも申合せていましたっけ。

いや、こうなると、やっぱり暗い方が配合（うつり）が可（よ）うございます、身が入りますぜ、これから。」

と言う、幹事雑貨店主の冴(さ)えた声が、キヤキヤと刻込(きざみこ)んで、響いて聞えて、声を聞く内だけ、その鼻の隆(たか)い、瘦(や)せて面長(おもなが)なのが薄ら蒼(あお)く、頰のげっそりと影の黒いのが、ぶよぶよとした出処(でどこ)の定かならぬ、他愛の無い明(あかり)に映って、ちょっとでも句が切れると、はたと顔も見えぬほどになったのである。

八

灯(あかり)は水道尻のその瓦斯(がす)と、もう二ツ——一ツは、この二階から斜違(はすっかい)な、京町(きょうまち)の向う角の大きな青楼の三

階の、真角（まっかど）一ツ目の小座敷の障子を二枚両方へ明放した裡（うち）に、青い、が、べっとりした蚊帳（かや）を釣って、行燈（あんどう）がある、それで。——夜目には縁も欄干（らんかん）も物色（うかが）われず、ただその映出（うつしだ）した処だけは、たとえば行燈の枠の剝（は）げたのが、朱塗（しゅぬり）であろう……と思われるほど定かに分る。……そこが仄明（ほのあかる）いだけ、大空の雲の黒さが、此方（こなた）に絞った幕の上を、底知れぬ暗夜（やみ）にする。……が、廓（くるわ）が寂れて、遠く衣紋坂（えもんざか）あたりを一つ行（ゆ）く俥（くるま）の音の、それも次第に近くはならず、途中の電信の柱があると、母衣（ほろ）が凧（いかのぼり）。引掛（ひっかか）りそうに便（たより）なく響（ひびき）が切れて行（ゆ）く光景（ありさま）なれば、のべの蝴蝶（ちょうちょう）が飛びそうな媚（なまめ）かしさは

無く、荒廃したる不夜城の壁の崩れから、菜畠になった部屋が露出(むきだ)しで、怪しげな朧月(おぼろづき)めく。その行燈の枕許(まくらもと)に、有ろう？　朱羅宇(しゅらお)の長煙管(ながぎせる)が、蛇になって動きそうに、蓬々(おどろおどろ)と、曠野(あれの)に徜徉(さまよ)う夜の気勢(けはい)。地蔵堂に釣った紙帳より、かえって侘(わび)しき草の閨(ねや)かな。

　風の死んだ、寂(しん)とした夜で、あたかも宙に拡げたような、蚊帳のその裙(すそ)が、そよりと戦(そよ)ぐともしないのに、この座の人の動くに連れて、屋の棟とともに、すっと浮いて上ったり、ずうと行燈と一所に、沈んで下ったりする。

　もう一つは同じ向側の、これは低い、幕の下に懸(かか)っ

て、真暗（まっくら）な門（かど）へ、奥の方から幽かに明（あかり）の漏れるのが、戸の格子の目も疎（まばら）に映って、灰色に軒下の土間を茫（ぼう）と這（ほ）うて、白い暖簾（のれん）の断（ちぎ）れたのを泥に塗（まみ）らした趣がある。それと二つである。

その家は、表をずッと引込（ひっこ）んだ処に、城の櫓（やぐら）のような屋根が、雲の中に陰気に黒い。両隣は引手茶屋で、それは既に、先刻（さっき）中引けが過ぎる頃、伸上って蔀（しとみ）を下ろしたり、仲の町の前後（あとさき）を見て戸を閉めたり、揃って、家並（やなみ）は残らず音も無いこの夜更（よふけ）の空を、地（じ）に引く腰張の暗い板となった。

時々、海老屋の大時計の面（つら）が、時間（とき）の筋を畝（うね）らして、

幽（かすか）な稲妻に閃（ひら）めき出るのみ。二階で便（たよ）る深夜の光は、瓦斯（がす）を合わせて、ただその三つの灯（ともしび）となる。

中のどれかが、折々気紛（きまぐ）れの鳥影の映（さ）すように、飄然（ひらり）と幕へ附着（くっつ）いては、一同の姿を、種々（いろいろ）に描き出す。

……

時しもありけれ、魯智深が、大（おおい）なる挽臼（ひきうす）のごとき、五分刈頭を、天井にぐるりと廻して、

「佐川さんや、」

と顔は見えず……その天井の影が動く。話の切目で、咳（しわぶき）の音も途絶えた時で、ひょいと見ると誰の目にも、上にぼんやりと映る、その影が口を利くかと思われる。

従って、声もがッと太く渦巻く。

「変に静まりましたな、もって来いという間(ま)の時じゃ、何ぞお話し下さらんか。宵からまだ、貴下(あなた)に限って、一ツも凄(すご)いのが出ませんでな、所望ですわ。」

成程、民弥は聞くばかりで、まだ一題も話さなかった。

「差当り心当りが無いものですから、」

とその声も暗さを辿(たど)って、

「皆さんが実によく、種々(いろいろ)な可恐(おそろし)いのを御存じです。

……確(たしか)にお聞きになったり、また現に逢(あ)ったり見たりなすっておいでになります。

私は、又聞きに聞いたのだの、本で読んだのぐらいな処で、それも拵えものらしいのが多いんですから、差出てお話するほどのがありません。生憎……ッても可笑いんですが、ざらある人魂だって、自分で見た事はありませんでね。怪い光物といっては、鼠が啣え出した鱈の切身が、台所でぽたぽたと黄色く光ったのを見て吃驚したくらいなものです。お話にはなりません。

けれども、嬉しがって一人で聞かしてばかり頂いていたんでは、余り勝手過ぎます。申訳が無いようですから、詰らない事ですが、一つ、お話し申しましょう

か。
日の暮合いに、今日、現に、此家（ここ）へ参ります途中でした。」

九

「可恐（こわ）い事、ちょっと、可恐くって。」
と例の美しい若い声が身近に聞えて、ぞっとするように袖を窄（すぼ）めた気勢（けはい）がある。
「私に附着（くッつ）いていらっしゃい。」と蘭子が傍（そば）で、香水の優しい薫（かおり）。

「いや、下らないんですよ、」
と、慌てたように民弥は急いで断って、
「ちと薄気味でも悪いようだと、御愛嬌になるんだけれど……何にも彼にも、一向要領を得ないんです、……時にだね、三輪ちゃん。」
とちと更まって呼んだ時に、皆が目を灌ぐと、どの灯か、仏壇に消忘れたようなのが幽に入って、スーと民弥のその居直った姿を映す。……これは生帷の五ツ紋に、白麻の襟を襲ねて、袴を着でいた。――あたかもその日、繋がる縁者の葬式を見送って、その脚で廻ったそうで、時節柄の礼服で宵から同じ着附けが、

この時際立って、一人、舞台へ出たように目に留まった。麻は冷たい、さっくりとして膚にも着かず、肩肱は凜々しく武張ったが、中背で痩せたのが、薄ら寒そうな扮装、襟を引合わせているので物優しいのに、細面で色が白い。座中では男の中の第一年下の二十七で、少々しいのも気の弱そうに見えるのが、今夜の会には打ってつけたような野辺送りの帰りと云う。

　気のせいか、沈んで、悄れて見える処へ、打撞かったその冷い紋着で、水際の立ったのが、薄りと一人浮出したのであるから、今その呼懸けたお三輪さえ、声に応じて、結綿の綺麗な姿が、可恐そうな、可憐な風

情で、並んでそこへ、呼出されたように、座上の胸に描かれた。

「つかん事を聞くがね、どこかこの近所で、今夜あたりお産をしそうな人はあるまいか。」

と妙な事を沈んで聞く。

「今夜……ですか。」とお三輪はきっぱり聞返す。

「……そうだね、今夜、と極(き)まった事も無いけれど、この頃にさ、そういう家(うち)がありやしないかい。」

「嬰児(あかんぼ)が生れる許(とこ)？」

「そうさ、」

「この近所、……そうね。」

せっかく聞かされたものを、あれば可(い)いが、と思う容子(ようす)で、しばらくして、
「無いわ、ちっと離れていては悪くって、江戸町辺。」
「そこらにあるかい。」
と気を入れる。
「無い事よ、——やっぱり、」とうっかりしたように澄まして言う。
「何だい、詰(つま)らない。」
と民弥は低声(こごえ)に笑(えみ)を漏らした。
「ちょいと、階下(した)へ行って、才(さあ)ちゃんに聞いて来ましょうか。」

「…………」

「ええ、兄さん、」

と遣(や)ったが、フト黙って、

「私、聞いて来ましょう、先生。」

「何、可(い)い、それには及ばんのだよ。……いいえ、少しね、心当りな事があるもんだから、そらね。」

と斜(ななめ)になって、俯向(うつむ)いて幕張(まくばり)の裾(すそ)から透かした、ト酔覚(よいざめ)のように、顔の色が蒼白(あおじろ)い。

「向うに、暗く明(あかり)の点(つ)いた家(うち)が一軒あるだろう……近所は皆(みんな)閉(しま)っていて。」

「はあ、お医者様のならび、あすこは寮よ……」

「そうだ、公園近だね。あすこへ時々客では無い、町内の人らしいのが、引過ぎになってもちょいちょい出たり入ったりするから、少しその心当りの事もあるし、……何も夜中の人出入りが、お産とは極らないけれど、その事でね。もしかすると、そうではあるまいか、と思ったからさ。何だか余り合点み過ぎたようで妙だったね。」

十

「それに何だか、明も陰気だし、人の出入りも、ばた

ばたして……病人でもありそうな様子だったもんだから。」

と言って、その明（あかり）を俯向（うつむ）いて見透かす、民弥の顔にまた陰気な影が映（さ）した。

「でもね、当りましたわ、先生、やっぱり病人があるのよ。それでもって、寝ないでいるの、お通夜（つや）をして……」

「お通夜？」

と一人、縁に寄った隅の方から、声を懸けた人がある。

「あの……」

「夜伽(よとぎ)じゃないか。」と民弥が引取(ひっと)る。

「ああ、そうよ。私は昨夜(ゆうべ)も、お通夜だってそう言って、才(さぁ)ちゃんに叱られました。……その夜伽なのよ。」

「病人は……女郎衆(じょうろしゅ)かい。」

「そうじゃないの。」

とついまたものいいが蓮葉(はすは)になって、

「照吉さんです、知ってるでしょう。」

民弥は何か曖昧(あいまい)な声をして、

「私は知らないがね、」

けれども一座の多人数は、皆耳を欹(そばだ)てた。——彼は聞えた妓(おんな)である——中には民弥の知らないという、

その訳をさえ、よく心得たものがある。その梅次と照吉とは、待宵（まつよい）と後朝（きぬぎぬ）［＃ルビの「きぬぎぬ」は底本では「きねぎぬ」］、と対（つい）に廓（くるわ）で唄われた、仲の町の芸者であった。

お三輪はサソクに心着いたか、急に声も低くなって、

「芸者です、今じゃ、あの、一番綺麗な人なんです、芸も可（い）いの。可哀相だわ、大変に塩梅（あんばい）が悪くって。それだもんですから、内は角町（すみちょう）の水菓子屋で、出ているのは清川（引手茶屋）なんですけれど、どちらも狭いし、それに、こんな処でしょう、落着いて養生も出来ないからって……ここでも大切な姉（ねえ）さんだわ。ですか

ら皆(みんな)で心配して、海老屋でもしんせつにそう云ってね、四五日前から、寮で大事にしているんですよ。」
「そうかい、ちっとも知らなかった。」と民弥はうっかりしたように言う。
「夜伽(よとぎ)をするんじゃや、大分悪いな。」と子爵が向うから声を懸けた。
「ええ、不可(いけな)いんですって、もうむずかしいの。」
とお三輪は口惜(くや)しそうに、打附(ぶッつ)けて言ったのである。
「何の病気かね。」
と言う、魯智深の頭は、この時も天井で大きく動いた。

「何んですか、性がちっとも知れないんですって。」
民弥は待構えてでもいたように、
「お医師は廓のなんだろう、……そう言っちゃ悪いけれど。」
「いいえ、立派な国手も綱曳でいらっしゃったんですの。でもね、ちっとも分りませんとさ。そしてね、照吉さんが、病気になった最初っから、なぜですか、もうちゃんと覚悟をして、清川を出て寮へ引移るのにも、手廻りのものを、きちんと片附けて、この春から記けるようにしたっちゃ、威張っていた、小遣帳の、あの、蜜豆とした処なんか、棒を引いたんですってね。才

ちゃんはそう言って、話して、笑いながら、ほろほろ涙を落すのよ。

いつ煩っても、ごまかして薬をのんだ事のない人が、その癖、あの、……今度ばかりは、搔巻に凭懸っていて、お猪口を頂いて飲むんだわ。それがなお心細いんだって、皆そう云うの。

私も、あの、手に持って飲まして来ます。

（三輪ちゃん、さようなら。）って俯向くんです、……枕にこぼれて束ね切れないの、私はね、櫛を抜いて密と解かしたのよ……雲脂なんかちっとも無いの、するする綺麗ですわ、そして煩ってから余計に殖えたよう

よ……髪ばかり長くなって、段々命が縮むんだわねえ。
——兄さん、」
と、話に実が入(い)るとつい忘れる。
「可哀相よ。そして、いつでもそうなの、見舞に行(ゆ)くたんびに（さようなら）……」

十一

「それはもう、きれいに断念(あきら)めたものなの、……そしてね、幾日(いくか)の何時頃に死ぬんだって——言うんですとさ、——それが延びたから今日はきっと、あれだって、

また幾日の何時頃だって、どうしてでしょう。死ぬのを待っているようなの。

ですからね、照吉さんのは、気病（きやみ）だって。それから大事の人の生命（いのち）に代って身代（みがわり）に死ぬんですって。」

「身代り、」と聞返した時、どのかまた明（あかり）の加減で、民弥の帷子（かたびら）が薄く映った。且つそれよりも、お三輪の手絡（てがら）が、くっきりと燃ゆるように、声も強い色に出て、

「ええ、」

と言う、目も睜（みは）られた気勢（けはい）である。

「この方が怪談じゃ、」と魯智深が寂しい声。堀子爵が居直って、

「誰の身代りだな、情人（いいひと）のか。」

「あら、情人（いいひと）なら兄さんですわ、」

と臆（おく）せず……人見知（ひとみしり）をしない調子で、

「そうじゃないの、照吉さんのは弟さんの身代りになったんですって。——弟さんはね、先生、自分でも隠してだし、照吉さんも成りたけ誰にも知らさないようにしているんだけれど、こんな処の人のようじゃないの。

学校へ通って、学問をしてね、よく出来るのよ。そして、今じゃ、あの京都の大学へ行っているんです。卒業すれば立派な先生になるんだわ、ねえ。先生。

姉さんもそればっかり楽(たのし)みにして、地道に稼いじゃ、
お金子(かね)を送っているんでしょう。……ええ、あの、」
と心得たように、しかも他愛の無さそうに、
「水菓子屋の方は、あれは照吉さんの母(おっか)さんがはじめた店を、その母(おっか)さんが亡くなって、姉弟(きょうだい)二人ぼっちになって、しようが無いもんですから、上州の方の遠い親類の人に来てもらって、それが世話をするんですけれど、どうせ、あれだわ。田舎を打棄(うっちゃ)って、こんな処へ来て暮そうって人なんだから、人は好(い)いけれども商売は立行(たちゆ)かないで、照吉さんには、あの、重荷に小附(こづけ)とかですってさ。ですから、お金子でも何でも、

皆(みんな)姉さんがして、それでも楽(たの)しみにしているんでしょう。

　そうした処が、この二三年、その弟さんが、大変に弱くなったの。困るわねえ。——試験が済めばもう卒業するのに、一昨年(おととし)も去年もそうなのよ、今年もやっぱり。続いて三年病気をしたの。それもあの、随分大煩いですわ、いつでも、どっと寝るんでしょう。

　去年の時はもう危ないって、電報が来たもんですから、姉さんが無理をして京都へ行ったわ。

　二年続けて、彼地(あっち)で煩ったもんですから、今年の春休みには、是非お帰んなさいって、姉さんも云って

あげるし、自分でも京都の寒さが不可（いけな）いんだって、久しぶりで帰ったんです。

水菓子屋の奥に居たもんですから、内へも来たわ。若旦那（わかだんな）って才ちゃんが言うのよ。お父（とっ）さんはね、お侍が浪人をしたのですって、——石橋際に居て、寺子屋をして、御新造（ごしん）さんの方は、裁縫（おしごと）を教えたんですっさ、才ちゃんなんかの若い時分、お弟子よ。

あとで、私立の小学校になって、内の梅次さんも、子供の内は上ってたんですさ。お母（つか）さんの方は、私だって知ってるわ。品の可（い）い、背（せい）のすらりとした人よ。水菓子屋の御新造（ごしん）さんって、皆（みんな）がそう言ったの。

ですもの、照吉さんは芸者だけれど、弟さんは若旦那だわね。

また煩いついたのよ、困るわねえ。

そして長いの、どっと床に就いてさ。皆（みんな）、お気の毒だって、やっぱり今の、あの海老屋の寮で養生をして、同（おんな）じ部屋だわ。まわり縁の突当りの、丸窓の付いた、池に向いた六畳よ。

照吉さんも家業があるでしょう、だもんですから、ちょいとの隙（ひま）も、夜（よ）の目も寝ないで、附（つき）っ切りに看病して、それでもちっとも快（よ）くならずに、段々塩梅（あんばい）が悪くなって、花が散る頃だったわ、お医者様もね、もう

ね。」
　と言う、ちっと切なそうな息づかい。

十二

　お三輪は疲れて、そして遣瀬(やるせ)なさそうな声をして、
「才(さあ)ちゃんを呼んで来ましょうか、私は上手に話せませんもの。」と言う、覚束(おぼつか)ない娘の口から語る、照吉の身の上は、一層夜露に身に染みたのであった。
「可(い)いよ、三輪(みい)ちゃんで沢山だ。お話し、お話し、」と雑貨店主、沢岡が激ました。

「ええ、もうちっとだわ。——あの……それでお医者様が手放したもんですから、照吉さんが一七日（いちしちにち）塩断（しおだち）して……最初（はじめッ）からですもの、断つものも外に無いの。そして願掛けをしたんですって。どこかねえ、谷中（やなか）の方です。遠くまで、朝ねえ、まだ夜の明けない内に通ったのよ。そのお庇（かげ）で……きっとそのお庇だわ。今日にも明日にも、といった弟さんが、すっかり治ってね。夏のはじめに、でもまだ綿入を着たなりで、京都へ立って行ったんです。

　塩断をしたりなんかして、夜も寝なかった看病疲れが出たんだって、皆（みんな）そう言ったの。すぐ後で、姉さん

が病みついたんでしょう。そして、その今のような大病になったんでしょう。
ですがね、つい二三日前、照吉さんが、誰にも言わない事だけれどって、そう云って、内の才ちゃんに話したんですって。――あの、そのね、谷中へ願掛けをした、満願、七日(なぬか)目よ、……一七日(いちしちにち)なんですもの。いつもお参りをして帰りがけに、しらしらと夜の明ける時間なのが、その朝は、まだ真暗(まっくら)だったんですとさ。御堂を拝んで帰ろうとすると、上の見上げるような杉の大木の茂った中から、スーと音がして、ばったり足許へ落ちて来たものがあるの。常燈明の細い灯(あかり)で、

ちょいと見ると、鳥なんですって、死んだのだわねえ、もう水を浴びたように悚然として、何の鳥だかよくも見なかったけれど、謎々よ、……解くと、弟は助からないって事になる……その時は落胆して、苔の生えた石燈籠につかまって、しばらく泣きましたって、姉さんがね、……それでも、一念が届いて弟が助かったんですから……思い置く事はありません、――とさ。

ああ、きっとそれじゃ、……その時治らない弟さんの身代りに、自分がお約束をしたんだろう。それだから、ああやって覚悟をして死んで行くのを待っておいでだ。事によったら、月日なんかも、その時極めて頼

んだのかも分らない、可哀相だ、って才ちゃんも泣いていました。

そしてね、今度の世は、妹に生れて来て甘えよう、私は甘えるものが無い。弟は可羨(うらやま)しい、あんな大きななりをして、私に甘ったれますもの。でも、それが可愛くって殺されない。前(さき)へ死ぬ方がまだ増(まし)だ、あの子は男だから堪(こら)えるでしょう、……後へ残っちゃ、私は婦(おんな)で我慢が出来ないって言ったんですとさ。……ちょいとどうしましょう。私、涙が出てよ。……

どうかして治らないものでしょうか。誰方(どなた)か、この中に、お医者様の豪(えら)い方はいらっしゃらなくって、え

え、皆さん。」
一座寂然した。
「まあ、」
「ねえ……」
と、蘭子と種子が言交わす。
「弱ったな、……それは、」とちょいと間を置いてから、
子爵が呟いたばかりであった。
「時に、」
と幹事が口を開いて、
「佐川さん、」
「は、」

と顔を上げたが、民弥はなぜかすくむようになって、身体（からだ）を堅く俯向（うつむ）いてそれまで居た。
「お話しの続きです。——貴下（あなた）がその今日途中でその、何か、どうかなすったという……それから起ったんですな、三輪ちゃんの今の話は。」
「そうでしたね。」とぼやりと答える。
「その……近所のお産のありそうな処は無いかって、何か、そういったような事から。」
「ええ、」
とただ、腕を拱（こまぬ）く。
「どういう事で、それは、まず……」

「一向、詰(つま)らない、何、別に、」と可恐(おそろ)しく謙遜(けんそん)する。
人々は促した。——

十三

「——気が射(さ)したから、私は話すまい、と思った。けれども、行懸(ゆきがか)り［#ルビの「ゆきがか」は底本では「ゆきかが」］で、揉消(もみけ)すわけにも行かなかったもんだから、そこで何だ。途中で見たものの事を饒舌(しゃべ)ったが、」
と民弥は、西片町(にしかたまち)のその住居(すまい)で、安価(やす)い竈(かまど)を背負(しょ)って立つ、所帯の相棒、すなわち梅次に仔細(しさい)を語る。……

…会のあった明晩（あくるばん）で、夏の日を、日が暮れてからやっと帰ったが、時候あたりで、一日寝ていたとも思われる。顔色も悪く、気も沈んで、太（いた）く疲れているらしかった。

寒気がするとて、茶の間の火鉢に対向（さしむか）いで、

「はじめはそんな席へ持出すのに、余り栄（は）えな過ぎると思ったが、——先刻（さっき）から言った通り——三輪坊（みいぼう）がしたお照さんのその話を聞いてからは、自分だけかも知れないが、何とも言われないほど胸が鬱（ふさ）いだよ。第一、三輪坊が、どんなにか、可恐（こわ）がるだろう、と思ってね。場所が谷中だと言うんだろう、……私の出会ったの

もやっぱりそこさ。――闇《くら》がり坂《ざか》を通った時だよ。」

「はあ、」と言って、梅次は、団扇《うちわ》を下に、胸をすっと手を支《つ》いた。が、黒繻子《くろじゅす》［#ルビの「くろじゅす」は底本では「くろじゅず」］の引掛《ひっか》け結びの帯のさがりを斜《ななめ》に辷《すべ》る、指の白さも、団扇の色の水浅葱《みずあさぎ》も、酒気《さけけ》の無い、寂しい茶の間に涼し過ぎた。

民弥は寛《くつろ》ぎもしないで、端然《ちゃん》としながら、

「昨日《きのう》は、お葬式《とむらい》が後《おく》れてね、すっかり焼香の済んだのが、六時ちょっと廻った時分。後で挨拶をしたり、……茶屋へ引揚げて施主たちに分れると、もう七時じゃないか。

会は夜あかしなんだけれど、ゆっくり話そうって、幹事からの通知は七時遅からず。私にも何かの都合で、一足早く。承知した、と約束がしてある。……久しぶりのお天気だし、涼（すずし）いし、紋着（もんつき）で散歩もおかしなものだけれども、ちょうど可（い）い。廓（なか）まで歩行（ある）いて、と家（うち）を出る時には思ったんだが、時間が遅れたから、茶屋の角で直ぐに腕車（くるま）をそう言ってね。

乗ってさ。出る、ともう、そこらで梟（ふくろう）の声がする。寂寥（しん）とした森の下を、墓所に附いて、薄暮合いに蹴込（けこみ）が真赤（まっか）で、晃々（きらきら）輪が高く廻った、と思うと、早や坂だ。——切立（きった）てたような、あの闇がり坂、知ってたっけか。」

「根岸から天王寺へ抜ける、細い狭い、蔽被(おっかぶ)さった処でしょう。——近所でも芋坂の方だと、ちょいちょい通って知ってますけれど、あすこは、そうね、たった一度。可厭(いや)な処だわね、そこでどうかなすったんですか。」

「そうさ、よく路傍(みちばた)の草の中に、揃えて駒下駄(こまげた)が脱いであったり、上の雑樹の枝に蝙蝠傘(こうもり)がぶら下っていたり、鉄道で死ぬものは、大概あの坂から摺込(ずりこ)むってね。手巾(ハンケチ)が一枚落ちていても慄然(ぞっ)とする、と皆(みんな)が言う処だよ。

　昼でも暗いのだから、暮合(くれあい)も同(おんな)じさ。別に夜中で

は無し、私は何にも思わなかったんだが、極（きま）って腕車（くるま）から下りる処さ、坂の上で。あの急勾配だから。

　下りるとね、車夫（わかいし）はたった今乗せたばかりの処だろう、空車（からぐるま）の気前を見せて、一（ひと）つ駆（が）けで、顱巻（はちまき）の上へ梶棒（かじぼう）を突上げる勢（いきおい）で、真暗（まっくら）な坂へストンと摺込（すべりこ）んだと思うと、むっくり線路の真中（まんなか）を躍り上って、や、と懸声だ。そこはまだ、仄（ほんの）り明（あか）るい、白っぽい番小屋の、蒼（あお）い灯（ひ）を衝（つッ）と切って、根岸の宵の、蛍のような水々（みずみず）した灯（あかり）の中へ消込（きえこ）んだ。

　蝙蝠（こうもり）のように飛ぶんだもの、離れ業と云って可（い）い速さなんだから、一人でしばらく突立（つった）って見ていたがね、

考えて見ると、面白くも何とも無いのさ。

足許だけぼんやり見える、黄昏(たそがれ)の木(こ)の下闇(したやみ)を下り懸けた、暗さは暗いが、気は晴々(せいせい)する。

以前と違って、それから行(ゆ)く、……吉原には、恩愛もなし、義理もなし、借もなし、見得外聞があるじゃなし……心配も苦労も無い。叔母さんに貰(もら)った仲の町の江戸絵を、葛籠(つづら)から出して頬杖(ほおづえ)を支(つ)いて見るようなもんだと思って。」

十四

「坂の中途で——左側の、」

と長火鉢の猫板を圧（おさ）えて言う。

「樹の根が崩れた、じとじと湿っぽい、赤土の色が蚯蚓（みみず）でも団（かたま）ったように見えた、そこにね。」

「ええ」

と梅次は眉を顰（ひそ）めた。

「大丈夫、蛇の話じゃ無い。」とこれは元気よく云って、湯呑（ゆのみ）で一口。

「人が居たのさ。ぼんやりと小さく蹲（しゃが）んで、卜目に着くと可厭（いや）な臭気（におい）がする、……地（つち）へ打坐（ぶっすわ）ってでもいるかぐらい、ぐしゃぐしゃと挫（ひしゃ）げたように揉潰（もみつぶ）した形で、

暗いから判然せん。

が、別に気にも留めないで、ずっとその傍を通抜けようとして、ものの三足ばかり下りた処だった。

（な、な、）と言う。

雪駄直しだか、唖だか、何だか分らない。……聞えたばかり。無論、私を呼んだと思わないから、構わず行こうとすると、

（なあ、）と、今度はちっとぼやけたが、大きな声で、

そして、

（袴着た殿い、な、）と呼懸ける、確かに私を呼んだんだ。どこの山家のものか知らんが、変な声で、妙な

ものいいさ。「袴着た、」と言うのか、どっちにしても「殿」は気障(きざ)だ。が、確(たしか)に呼留めたに相違無いから、

（俺(おれ)か。）

（それよ、）……と、気になる横柄な返事をして、もやもやと背伸びをして立った……らしい、頭(つむり)を擡(もた)げたのか、腰を起(た)てたのか、上下同(うえしたおんな)じほどに胴中(どうなか)の見えたのは、いずれ大分の年紀(とし)らしい。

爺(じじい)か、婆(ばばあ)か、ちょっと見には分らなかったが、手拭(てぬぐい)だろう、頭にこう仇白(あだじろ)いやつを畳んで載せた。それが顔に見えて、面(つら)は俯向(うつむ)けにしながら、杖(つえ)を支(つ)いた

影は映らぬ。
（殿、な、何処（いずく）へな。）
と、こうなんだ。
私は黙って視（なが）めたっけ。
じっと身動きもしないで、返事を待っているようだからね、
（吉原へ。）
と綺麗に言ったが、さあ、以前なら、きっとそうは言わなかったろう。その空がさっぱりと晴々した心持だから、誰に憚（はばか）る処も無い。おつけ晴れたのが、不思議に嬉しくもあり、また……幼い了簡（りょうけん）だけれども、何

か、自分でも立派に思った。

（真北じゃな、ああ、）

とびくりと頷（うなず）いて、

（火の車で行（ゆ）かさるか。）［＃「）」は底本では「」」］

馬鹿にしている、……此奴（こいつ）は高利貸か、烏金（からすがね）を貸す爺婆（じじばば）だろうと思ったよ。」

と民弥は寂（さみ）しそうなが莞爾（にっこり）した。

梅次がちっと仰向（あおむ）くまで、真顔で聞いて、

「まったくだわねえ。」

「いや、」

民弥は、思出したように、室（へや）の内（なか）を眴（みまわ）しながら、

「烏金……と言えば、その爺婆は、荒縄で引括(ひっくく)って、烏の死んだのをぶら下げていたのよ。」

梅次は胸を突かれたように、

「へい、」と云って、また、浅葱(あさぎ)のその団扇(うちわ)の上へ、白い指。

「堪(たま)らない。幾日(いくか)経(た)ったんだか、べろべろに毛が剥(は)げて、羽がぶらぶらとやっと繋(つな)って、地(じ)へ摺(す)れて下ってさ、頭なんざ爛(ただ)れたようにべとべとしている、その臭気(におい)だよ。何とも言えず変に悪臭いのは、——奴(やつ)の身体(からだ)では無い。服装(みなり)も汚くはないんだね、折目の附いたと言いたいが、それよりか、皺(しわ)の無いと言った方が

適（い）い、坊さんか、尼のような、無地の、ぬべりとしたのでいた。

まあ、それは後での事。

（何の車？……）と聞返した。

（森の暗さを、真赤（まっか）なものが、めいらめいら搦（から）んで、車が飛んだでやいの。恐ろしやな、活（い）きながら鬼が曳（ひ）くさを見るかいや。のう殿。私（わし）は、これい、地板（じびた）へ倒りょうとしたがいの。……うふッ、）と腮（あご）の震えたように、せせら笑ったようだっけ、――ははあ……」

十五

「今の腕車（くるま）に、私が乗っていたのを知って、車夫（わかいし）が空（から）で駆下りた時、足の爪を轢（ひ）かれたとか何とか、因縁を着けて、端銭（はした）を強請（ゆす）るんであろうと思った。

　しかし言種（いいぐさ）が変だから、

（何の車？）ともう一度……わざと聞返しながら振返ると、

（火の車、）

と頭から、押冠（おっかぶ）せるように、いやに横柄に言って、もさりと歩行（ある）いて寄る。

　なぜか、その人を呪（のろ）ったような挙動（しぐさ）が、無体に癪（しゃく）に

障ったろう。

（何の車？）と苛々（いらいら）としてこちらも引返した。

（火の車。）

じりじりとまた寄った。

（何の車？）

（火の車、）

（火の車がどうした。）

とちょうど寄合わせた時、少し口惜（くやし）いようにも思って、突懸（つっかか）って言った、が、胸を圧（おさ）えた。可厭（いや）なその臭気（におい）ったら無いもの。

（私（わし）に貸さい、の、あのや、燃え搦（から）まった車で、逢魔（おうま）ケ

時に、真北へさして、くるくる舞いして行(ゆ)かさるは、少(わか)い身に可(よ)うないがいや、の、殿、……私(わし)に貸さい。車借りて飛ばしたい、えらく今日は足がなえたや、やれ、の、草臥(くたび)れたいの、やれやれ、）

　と言って、握拳(にぎりこぶし)で腰をたたくのが、突着けて、ちょうど私の胸の処……というものは、あの、急な狭い坂を、奴(やつ)は上の方に居るんだろう。その上、よく見ると、尻をこっちへ、向うむきに屈(かが)んで、何か言っている。

　癩(かったい)に棒打(ぼううち)、喧嘩(けんか)にもならんではないか。

（どこへ行(ゆ)くんだい、そして、）ッて聞いて見た。

（同じ処への、）

（吉原か。）

（さればい、それへ。）

とこう言う。

（何しに行（ゆ）くんだね。）

（取揚げに行（ゆ）く事よ。）

ああ、産婆か。道理で、と私は思った。今時そんなのは無いかも知れんが、昔の産婆（ばあ）さんにはこんな風なのが、よくあった。何だか、薄気味の悪いような、横柄で、傲慢（ごうまん）で、人を舐（な）めて、一切心得た様子をする、檀那寺（だんなでら）の坊主、巫女（いちこ）などと同じ様子で、頼む人から一目置かれた、また本人二目も三目も置かせる気。昨日（きのう）

のその時なんか、九目（せいもく）という応接（あしらい）です。

なぜか、根性曲りの、邪慳（じゃけん）な残酷なもののように、……絵を見てもそうだろう。産婦が屏風（びょうぶ）の裡（うち）で、生死（いきしに）の境、恍惚（うっとり）と弱果てた傍（わき）に、襷（たすき）がけの裾端折（すそはしより）か何かで、ぐなりとした嬰児（あかんぼ）を引摑（ひッつか）んで、盥（たらい）の上へぶら下げた処などは、腹を断割（たちわ）ったと言わないばかり、意地くねの悪い姑（しゅうとめ）の人相を、一人で引受けた、という風なものだっけ。

吉原へ行（ゆ）くと云う、彼処等（あすこいら）じゃ、成程頼みそうな昔の産婆だ、とその時、そう思ったから、……後で蔦屋（つたや）の二階で、皆（みんな）に話をする時も、フッとお三輪に、（ど

こかお産はあるか）って聞いたんだ。
もうそう信じていた。
でも、何だか、肝が起って、じりじりしてね、おかしく自分でも自棄になって、
（貸してやろう、乗っといで。）
（柔順なものじゃ、や、よう肯かしゃれたの……おおおお。）と云って臀を動かす。
変なものをね、その腰へ当てた手にぶら下げているじゃないか。――鳥の死骸だ。
（何にする、そんなもの。）
（禁厭にする大事なものいの、これが荷物じゃ、火の

車に乗せますが、やあ、殿。）
（堪（たま）らない！　臭くって、）
と手巾（ハンケチ）へ唾を吐いて、
（車賃は払っておくよ。）
で、フイと分れたが、さあ、踏切を越すと、今の車はどこへ行ったか、そこに待っている筈（はず）のが、まるで分らない。似たやつどころか、また近所に、一台も腕車（くるま）が無かった。……
変じゃないか。」

十六

しばらくして、
「お三輪が話した、照吉が、京都の大学へ行ってる弟の願懸けに行って、堂の前で気落(きおち)した、……どこだか知らないが、谷中の辺で、杉の樹の高い処から鳥が落ちて死んだ、というのを聞いた時、……何の鳥とも、照吉は、それまでは見なかったんだそうだけれども、私は何だよ……

思わず、心が、先刻(さっき)の暗がり坂の中途へ行って、そのおかしな婆々(ばばあ)が、荒縄でぶら提げていた、腐った鳥の事を思ったんだ。照吉のも、同じ鳥じゃ無かろうか

と……それに、可なり大きな鳥だというし……いいや！」

梅次のその顔色を見て、民弥は圧えるように、

「まさか、そんな事はあるまいが、ただそこへ考えが打撞っただけなんだよ。……

だから、さあ、可厭な気持だから、もう話さないでおきたかったんだけれども、話しかけた事じゃあるし、どうして、中途から弁舌で筋を引替えようという、器用なんじゃ無い。まじまじ遣った……もっとも荒ッぽく……それでも、鳥の死骸を持っていたッて、そう云うと、皆が妙に気にしたよ。

お三輪は、何も照吉のが烏だとも何とも、自分で言ったのじゃ無いから、別にそこまでは気を廻さなかったと見えて、暗号に袖を引張らなかった。もうね、可愛いんだ、――ああ、可恐い、と思うと、極ったように、私の袂を引張たっけ、しっかりと持って――左の、ここん処に坐っていて、」

と猫板の下になる、膝のあたりを熟と視た。……

「煙管？」

「ああ、」

「上げましょう。……」

と、トンと払いて、

「あい。……どうしたんです、それから、可厭（いや）ね、何だか私は、」と袖を合わせる。

「するとだ……まだその踏切を越えて腕車（くるま）を捜したッてまでにも行（ゆ）かず……其奴（そいつ）の風采（ふうつき）なんぞ悉（くわ）しく乗出して聞くのがあるから、私は薄暗がりの中だ。判然とはしないけれど、朧気（おぼろげ）に、まあ、見ただけをね、喋舌（しゃべ）ってる中（うち）に、その……何だ。

向う角の女郎屋（じょろや）の三階の隅に、真暗（まっくら）な空へ、切って嵌（は）めて、裾（すそ）をぼかしたように部屋へ蚊帳（かや）を釣って、寂然（しん）と寝ているのが、野原の辻堂に紙帳（しちょう）でも掛けた風で、恐しくさびれたものだ、と言ったっけ。

その何だよ。……蚊帳の前へ。」

「ちょいと、」と梅次は、痙攣(ひッつ)るばかり目を睜(みは)って膝をずらした。

「大丈夫、大丈夫、」

と民弥はまたわずかに笑(えみ)を含みつつ、

「仲の町越しに、こちらの二階から見えるんだから、丈が……そうさ、人にして二尺ばかり、一寸法師ッか無いけれど、何、普通で、離れているから小さいんだろう。……婆さんが一人。

大きな蜘蛛(くも)が下りたように、行燈(あんどう)の前へ、もそりと

出て、蚊帳の前をスーと通る。……擦れ擦れに見えたけれども、縁側を歩行(ある)いたろう。が、宙を行(ゆ)くようだ。それも、黒雲の中にある、青田のへりでも伝うッて形でね。

京町の角の方から、水道尻の方へ、やがて、暗い処へ入って隠れたのは、障子の陰か、戸袋の背後(うしろ)になったらしい。

遣手(やりて)です、風が、大引前(おおびけまえ)を見廻ったろう。

それが見えると、鉄棒(かなぼう)が遠くを廻った。……カラカラ、……カンカン、何だか妙だね、あの、どうか言うんだっけ。」

「チャン、カン、チャンカン……ですか。」と民弥の顔を瞻(みつ)めながら、軽く火箸(ひばし)を動かしたが、鉄瓶にカタンと当った。

「あ、」

と言って、はっと息して、

「ああ、吃驚(びっくり)した。」

「ト今度は、その音に、ずッと引着けられて、廓中(くるわじゅう)の暗い処、暗い処へ、連れて歩行(ある)くか、と思うばかり。」

十七

「話してる私も黙れば、聞いている人たちも、ぴったり静まる……と遣手(やりて)らしい三階の婆々(ばばぁ)の影が、蚊帳の前を真暗(まっくら)な空の高い処で見えなくなる、——とやがてだ。

二三度続け様に、水道尻居まわりの屋根近(やねぢか)な、低い処で、鴉(からす)が啼(な)いた。夜鳥も大引けの暗夜(やみ)だろう、可厭(いや)な声といったら。

すたすたとけたたましい出入りの跫音(あしおと)、四ツ五ツ入乱れて、駆出す……馳込(はしりこ)むといったように、しかも、なすりつけたように、滅入(めい)って、寮の門(かど)が慌(あわただ)しい。

私の袂(たもと)を、じっと引張って、

(あれ、照吉姉《ねえ》さんが亡くなるんじゃなくッて)ッて、少し震えながらお三輪が言うと、

(引潮時だねちょうど……)と溜息《ためいき》をしたは、油絵の額縁を拵《こしら》える職人風の鉄拐《てっか》な人で、中での年寄だった。

婦人《おんな》の一人が、

(姉さん、姉さん)

と、お三輪を、ちょうどその時だった、呼んだのが、なぜか、気が移って、今息を引取ろうという……照吉の枕許に着いていて言うような、こう堅くなった沈んだ声だった。

(はい)

とこれも幽(かすか)にね。

浜谷ツて人だ、その婦人は、お蘭さんというのが、

(内にお婆さんはおいでですか。)

と聞くじゃないか。」

「まあ、」と梅次は呼吸(いき)を引く。

民弥は静(しずか)に煙管(きせる)を置いて、

「お才さんだって、年じゃあるが、まだどうして、姉(あね)えで通る、……婆さんという見当では無い。皆(みんな)、それに、それだと顔は知っている。

女中がわりに送迎(おくりむかえ)をしている、前(ぜん)に、それ、柳橋の芸者だったという、……耳の遠い、ぼんやりした、

何とか云う。」

「お組さん、」

「粋（いき）な年増（としま）だ、可哀相に。もう病気であんなになってはいるが……だって白髪（しらが）の役じゃ無い。

（いいえ、お婆さんは居ませんの。）

（そう……）

と婦人が言ったっけ。附着（くッつ）くようにして、床の間の傍正面（わきしょうめん）にね、丸窓を背負（しょ）って坐っていた、二人、背後（うしろ）が突抜けに階子段（はしごだん）の大きな穴だ。

その二人、もう一人のが明座ッてやっぱり婦人で、今のを聞くと、二言ばかり、二人で密々（ひそひそ）と言ったが否

や、手を引張合(ひっぱりあ)った様子で、……もっとも暗くってよくは分らないが。そしてスーと立って、私の背後(うしろ)へ、足袋の白いのが颯(さっ)と通って、香水の薫(かおり)が消えるように、次の四畳を早足でもって、トントンと階下(した)へ下りた。

また、皆(みんな)、黙ったっけ。もっとも誰が何をして、どこに居るんだか、暗いから分らない。

しばらく、袂(たもと)の重かったのは、お三輪がしっかり持ってるらしい。

　急に上(あが)って来ないだろう。

（階下(した)じゃ起きているかい。）

（起きてるわ、あの、だけど、才(さあ)ちゃんは照吉さんの

許（とこ）へちょっと行ってるかも知れなくってよ。）
（何は、何だっけ。）
（お組さん、……ええ、火鉢の許（とこ）に居てよ。でも、もうあの通りでしょう、坐眠（いねむり）をしているかも分らないわ。）
（三輪ちゃんか、ちょっと見てあげてくれないか、はばかりが分らないのかも知れないぜ。）と一人気を着けた。
（ええ、）
てツたが、もう可恐（こわ）くツて一人では立てません。
もう一ツ、袂が重くなって、

（一所に……兄さん、）

　と耳の許（とこ）へ口をつける……頬辺（ほっぺた）が冷（ひや）りとするわね、鬢（びん）の毛で。それだけ内証（ないしょ）のつもりだろうが、あの娘（こ）だもの、皆（みんな）、聞えるよ。

（ちょいと、失礼。）

（奥方に言いつけますぜ。）と誰か笑った、が、それも陰気さ。」

十八

「暗い階子（はしご）をすっと抜ける、と階下（した）は電燈（でんき）だ、お三輪

は颯(さっ)と美しい。

見ると、どうです……二階から下して来て、足の踏場も無かった、食物、道具なんか、掃いたように綺麗に片附いて、門(かど)を閉めた。節穴へ明(あかり)が漏れて、古いから森のよう、下した蔀(しとみ)を背後(うしろ)にして、上框(あがりがまち)の、あの……客受けの六畳の真中処(まんなかどころ)へ、二人、お太鼓の帯で行儀よく、まるで色紙へ乗ったようでね、ける、かな、と端然(きちん)と坐ってると、お組が、精々気を利かしたつもりか何かで、お茶台に載っかって、ちゃんとお茶がその前へ二つ並んでいます……

お才さんは見えなかった。

ところが、お組があれだろう。男なら、骨（こつ）でなり、勘でなり、そこは跋（ばつ）も合わせようが、何の事は無い、松葉ヶ谷（やつ）の尼寺へ、振袖の若衆（わかしゅ）が二人、という、てんで見当の着かないお客に、不意に二階から下りて坐られたんだから、ヤ、妙な顔で、きょとんとして。……

次の茶の室（ま）から、敷居際まで、擦出（ずりだ）して、煙草盆（たばこぼん）にね、一つ火を入れたのを前に置いて、御丁寧に、もう一つ火入（ひいれ）に火を入れている処じゃ無いか。

座蒲団（ざぶとん）は夏冬とも残らず二階、長火鉢の前の、そいつは出せず失礼と、……煙草盆を揃えて出した上へ、団扇（うちわ）を二本の、もうちっとそのままにしておいたら、

お年玉の手拭（てぬぐい）の残ったのを、上包みのまま持って出て、別々に差出そうという様子でいる。

さあ、お三輪の顔を見ると、嬉しそうに双方を見較べて、吻（ほっ）と一呼吸（ひといき）を吐（つ）いた様子。

（才ちゃんは、）

とお三輪が、調子高に、直ぐに聞くと、前（さき）へ二つばかりゆっくりと、頷（うなず）き頷き、

（姉さんは、ちょいと照吉さんの様子を見に……あの、三輪ちゃん。）

と戸棚へ目を遣（や）って、手で円いものをちらりと拵（こしら）えたのは、菓子鉢へ何か？　の暗号（あいず）。」

ああ、病気に、あわれ、耳も、声も、江戸の張(はり)さえ抜けた状(さま)は、糊(のり)を売るよりいじらしい。

「お三輪が、笑止そうに、

(はばかりへおいでなすったのよ。)

お組は黙って頭(かぶり)を振るのさ。いいえ、と言うんだ。

そうすると、成程二人は、最初(はじめッ)からそこへ坐り込んだものらしい。

(こちらへいらっしゃいな。)とその一人が、お三輪を見て可懐(なつか)しそうに声を懸ける。

(佐川さん、)

と太(ひど)く疲れたらしく、弱々とその一人が、もっとも

夜更しのせいもあろう、髪もぱらつく、顔色も沈んでいる。

（どうしたんです。）と、ちょうど可い、その煙草盆を一つ引攫って、二人の前へ行って、中腰に、敷島を一本。さあ、こうなると、多勢の中から抜出したので、常よりは気が置けない。

（頭痛でもなさるんですか、お心持が悪かったら、蔭へ枕を出させましょうか。）

（いいえ、別に……）

（御無理をなすっちゃ不可ません。何だかお顔の色が悪い。）

（そうですかね。）とお蘭さんが、片頬を殺ぐように手を当てる。

（ねえ、貴方、お話しましょう。）

（でも……）

（ですがね、）

とちらちらと目くばせが閃めく、――言おうか、言うまいかッて素振だろう。

聞かずにはおかれない。

（何です、何です、）

と肩を真中へ挟むようにして、私が寄る、と何か内証の事とでも思ったろう、ぼけていても、そこは育

ちだ。お組が、あの娘（こ）に目で知らせて、二人とも半分閉めた障子の蔭へ。ト長火鉢のさしの向いに、結綿（ゆいわた）と円髷（まげ）が、ぽっと映って、火箸が、よろよろとして、鉄瓶がぽっかり大きい。

お種さんが小さな声で、

（今、二階からいらっしゃりがけに、物干の処で、）

とすこし身を窘（すく）めて、一層低く、

（何か御覧なさりはしませんか。）

私は悚然（ぞっ）とした。」

十九

「が、わざと自若(じじゃく)として、(何を、どんなものです。)って聞返したけれど、……今の一言で大抵分った、婆々(ばばあ)が居た、と言うんだろう。」

「可厭(いや)、」と梅次は色を変えた。

「大丈夫、まあ、お聞き、……というものは――内にお婆さんは居ませんか――ッて先刻(さっき)お三輪に聞いたから。……

はたして、そうだ。

(何ですか、お婆さんらしい年寄が、貴下(あなた)、物干から覗(のぞ)いていますよ。)

とまた一倍滅入った声して、お蘭さんが言うのを、

お種さんが取繕うように、

（気のせいかも知れません、多分そうでしょうよ……）

（いいえ、確なの、佐川さん、それでね、ただ顔を出して覗くんじゃありません。梟見たように、膝を立てて、蹲んでいて、窓の敷居の上まで、物干の板から密と出たり、入ったり、）

（ああ、可厭だ。）

と言って、揃って二人、ぶるぶると掃消すように袖を振るんだ。

その人たちより、私の方が堪りません。で無くって

さえ、蚊帳（かや）の前を伝わった形が、昼間の闇（くら）がり坂のに
肖（に）ていて堪（たま）らない処だもの、……烏は啼（な）く……とすぐにあの、寮の門（かど）で騒いだろう。

気にしたら、どうして、突然（いきなり）ポンプでも打撒（ぶちま）けたいくらいな処だ。

（いつから？……）

（つい今しがたから。）

（全体前（ぜん）にから、あの物干の窓が気になってしようがなかったんですよ。……時々、電車のですかね、電（いなびかり）ですか、薄い蒼（あお）いのが、真暗（まっくら）な空へ、ぼっと映（さ）しますとね、黄色くなって、大きな森が出て、そして、五重

の塔の突尖が見えるんですよ……上野でしょうか、天竺でしょうか、何にしても余程遠くで、方角が分りませんほど、私たちが見て凄かったんです。

その窓に居るんですもの。）

（もっとお言いなさいよ。）

（何です。）

（可厭だ、私は、）

（もっととは？）

（貴女おっしゃいよ、）

と譲合った。トお種さんが、障のお三輪にも秘したそうに、

（頭にね、何ですか、手拭のようなものを、扁たく畳んで載せているものなんです。貴下がお話しの通りなの、……佐川さん。）

私は口が利けなかった。――無暗とね、火入へ巻莨をこすり着けた。

お三輪の影が、火鉢を越して、震えながら、結綿が円髷に附着いて、耳の傍で、

（お組さん、どこのか、お婆さんは、内へ入って来なくッて？）

（お婆さん……）

とぼやけた声。

（大きな声をおしでないよ。）
と焦（じれ）ったそうにたしなめると、大きく合点々々（がってんがってん）しながら、
（来ましたよ。）
ときよとんとして、仰向いて、鉄瓶を撫（な）でて澄まして言うんだ。」
「来たの、」
と梅次が蘇生（よみがえ）った顔になる。
「三人が入乱れて、その方へ膝を向けた。
御注進の意気込みで、お三輪も、はらりとこっちへ立って、とんと坐って、せいせい言って、

（来たんですって。ちょいと、どこの人。）

と、でも、やっぱり、内証で言った。

胸から半分、障子の外へ、お組が、皆が、油へ水をさすような澄ました細面の顔を出して、

（ええ、一人お見えになりましてすよ。）

（いっさ？）

（今しがた、可厭な鴉が泣きましたろう……）

いや、もうそれには及ばぬものはまた意地悪く聞える、と見える。

（照吉さんの様子を見に、お才はんが駆出して行きなすった、門を開放したまんまでさ。）

皆（みんな）が振向いて門を見たんだ。」——

二十

「その癖門（かど）の戸は閉（しま）っている。土間が狭いから、下駄が一杯、杖（ステッキ）、洋傘（こうもり）も一束。大勢余（あんま）り隙（ひま）だから、歩行出（あるきだ）したように、もぞりもぞりと籐表（とうおもて）の目や鼻緒なんぞ、むくむく動く。

この人数が、二階に立籠（たてこも）る、と思うのに、そのまた静（しず）かさといったら無い。

お組がその儀は心得た、という顔で、

（後で閉めたんでございますがね、三輪（みい）ちゃん、お才はんが粗々（そそ）かしく、はあ。）

と私達を見て莞爾（にっこり）しながら、

（駆出して行（ゆ）きなすった、直き後でございますよ。入違いぐらいに、お年寄が一人、その隅（すみッ）こから、扁平（ひらべっ）たいような顔を出して覗（のぞ）いたんでございますよ。

何でも、そこで、お上（かみ）さんに聞いて来た、とそう言いなすったようでしたっけ……すたすた二階へお上（あが）りでございました。）

さ、耳の疎（うと）いというものは。

（どこの人よ。）

とお三輪が擦寄って、急込（せきこ）んで聞く。
（どこのお婆さんですか。）
（お婆さんなの、ちょいと……）
私たちが訊（たず）ねたい意（こころ）は、お三輪もよく知っている。闇（くら）がり坂以来、気になるそれが、爺（じじ）とも婆（ばば）とも判別（みわけ）が着かんじゃないか。
（でしょうよ、はあ、……余程（よっぽど）の年紀（とし）ですから。）
（いいえさ、年寄だってね、お爺さんもお婆さんもありますッさ。）
（それがね、それですがね三輪ちゃん。）
と頭（かぶり）を掉（ふ）って、

「どっちだかよく分りません。背(せい)の低い、色の黄色蒼(あお)い、突張(つっぱ)った、硝子(ビイドロ)で張ったように照々(てらてら)した、艶(つや)の可(い)い、その癖、随分よぼよぼして……はあ、手拭(てぬぐい)を畳んで、べったり被(かぶ)って。」

女たちは、お三輪と顔を見合わせた。

「それですが、どうかしましたか。」

「どうもこうもなくってよ……」とお三輪は情(なさけ)ない声を出す。

「不可(いけ)ませんでしたかねえ。私はやっぱり会にいらしった方か、と思って。」

「……成程な、」

と民弥は言い掛けて苦笑した。

「会へいらしったには相違は無い。

（今時分来る人があって、お組さん。もう二時半だわ。）

（ですがね、この土地ですし……ちょいと、御散歩にでもお出掛けなすったのが、帰って見えたかとも思いましたしさ……お怪（ばけ）の話をする、老人（としより）は居ないかッて、誰方（どなた）かお才はんに話しをしておいでだったし、どこか呼ばれて来たのかとも、後でね、考えた事ですよ。いえね、そんな汚い服装（なり）じゃありません。茶がかった鼠色の、何ですか無地もので、皺（しわ）のないのを着てでした。

けれども、顔で覗いてその土間へお入んさすった時は、背後（うしろ）向きでね、草履でしょう、穿物（はきもの）を脱いだのを、突然懐中（いきなりふところ）へお入れなさるから、もし、ッて留めたんですが、聞かぬ振（ふり）で、そして何です、そのまんま後びっしゃりに、ずるツかずるツかそこを通って、）

と言われた時は、揃って畳の膝を摺（ず）らした。

（この階子段（はしごだん）の下から、向直ってのっそりのっそり、何だか不躾（ぶしつけ）らしい、きっと田舎のお婆さんだろうと思いました。いけ強情な、意地の悪い、高慢なねえ、その癖しょなしょなして、どうでしょう、可恐（おそろし）い裾長（すそなが）で、……地（じ）へ引摺るんでございましょうよ。

裾端折を、ぐるりと揚げて、ちょいと帯の処へ挟んだんですがねえ、何ですか、大きな尻尾を捲いたような、変な、それは様子なんです。……

おや、無面目だよ、人の内へ、穿物を懐へ入れて、裾端折のまんま、まあ、随分なのが御連中の中に、とそう思っていたんですがね、へい、まぐれものなんでございますかい。）

わなわな震えて聞いていたっけ、堪らなくなった、と見えてお三輪は私に縋り着いた。

いや、お前も、可恐ながる事は無い。……

もう、そこまでになると、さすがにものの分った姉

さんたちだ、お蘭さんもお種さんも、言合わせたように。私にも分った。言出して見ると皆同一（おんなじ）。」……

二十一

「茶番さ。」

「まあ！」

「誰か趣向をしたんだね、……もっとも、昨夜（ゆうべ）の会は、最初から百物語に、白装束や打散（ぶっち）らし髪（がみ）で人を怯（おど）かすのは大人気無い、素（す）にしよう。——それで、電燈（でんき）だって消さないつもりでいたんだから。

けれども、その、しないという約束の裏を行(ゆ)くのも趣向だろう。集った中にや、随分娑婆気(しゃばっけ)なのも少くない。きっと誰かが言合わせて、人を頼んだか、それとも自から化けたか、暗い中から密(そっ)と摺抜(すりぬ)ける事は出来たんだ。……夜は更けたし、潮時を見計らって、……確(たしか)にそれに相違無い。

トそういう自分が、事に因ると、茶番の合棒(あいぼう)、発頭人(ほっとうにん)と思われているかも知れん。先刻(さっき)入ったという怪しい婆々(ばばあ)が、今現に二階に居て、傍(はた)でもその姿を見たものがあるとすれば……似たようなものの事を私が話したんだから。

（誰かの悪戯（いたずら）です。）

（きっとそう、）

と婦人（おんな）だちも納得した。たちまち雲霧が晴れたように、心持もさっぱりしたろう、急に眠気（ねむけ）が除（と）れたような気がした、勇気は一倍。

怪（け）しからん。鳥の羽に怯（おびや）かされた、と一の谷に遁込（にげこ）んだが、緋（ひ）の袴（はかま）まじりに鵯越（ひよどりご）えを逆寄（さかよ）せに盛返す……となると、お才さんはまだ帰らなかった。お三輪も、恐（こわ）いには二階が恐い、が、そのまま耳の疎（うと）いのと差対（さしむか）いじゃなお遣切（やりき）れなかったか、また袂（たもと）が重くなって、附着（くっつ）いて上（あが）ります。

それでも、やっぱり、物干の窓の前は、私はじめ悚然としたっけ。

ばたばたと忙しそうに皆坐った、旧の処へ。

で、思い思いではあるけれども、各自暗がりの中を、こう、……不気味も、好事も、負けない気も交って、その婆々だか、爺々だか、稀有な奴は、と透かした。

が居ない……」

梅次が、確めるように調子を圧えて、

「居ないの、」

「まあ、お待ち、」

と腕を組んで、胡坐を直して、伸上って一呼吸した。

「そこで、連中は、と見ると、いやもう散々の為体。時間が時間だから、ぐったり疲切って、向うの縁側へ摺出して、欄干に臂を懸けて、夜風に当っているのなどは、まだ確な分で。突臥したんだの、俯向いたんだの、壁で頭を冷してるのもあれば、煙管で額へ突支棒をして、畳へ踣めったようなのもある。……夜汽車が更けて美濃と近江の国境、寝覚の里とでもいう処を、ぐらぐら揺って行くようで、例の、大きな腹だの、瘦せた肩だの、帯だの、胸だの、ばらばらになったのが遠灯で、むらむらと一面に浮いて漾う。

（佐川さん、）

と囁くように、……幹事だけに、まだしっかりしていた沢岡でね。やっぱり私の隣りに坐ったのが、

（妙なものをお目に懸けます。）

（え、）

それ、婆々か、と思うとそうじゃ無い。

（縁側の真中の――あの柱に、凭懸ったのは太田（西洋画家）さんですがね、横顔を御覧なさい、頬がげっそりして面長で、心持、目許、ね、第一、髪が房々と真黒に、生際が濃く……灯の映る加減でしょう……どう見ても婦人でしょう。婦人も、産後か、病上りてった、あの、凄い蒼白さは、どうです。

もう一人。）

と私の脇の下へ、頭を突込むようにして、附着いて、低く透かして、

（あれ、ね、床の間の柱に、仰向けに凭れた方は水島（劇評家）さんです。フト口を開きか何か、寝顔はという躾で、額から顔へ、ぺらりと真白は手巾を懸けなすった……目鼻も口も何にも無い、のっぺらぽう……え、百物語に魔が魅すって聞いたが、こんな事を言うんですぜ。）

ところが、そんなので無いのが、いつか魅し掛けているので気になる……」

二十二

「そうすると、趣向をしたのはこの人では無いらしい、企謀(もくろ)んだものなら一番懸けに、婆々(ばばぁ)を見着けそうなものだから。

（ねえ、こっちにもう一つ異体(いてい)なのは、注連(しめ)でも張りそうな裸のお腹、……）

（何じゃやね、）と直きに傍(そば)だったので、琴の師匠は聞着けたが、

（いいえ、こちらの事で。）幹事が笑うと、欠伸(あくび)まじり

で、それなり、うとうと。

（まあ、これは一番正体が知れていますが、それでも唐突(だしぬけ)に見ると吃驚(びっくり)しますぜ。で、やっぱりそれ、燭台(しょくだい)の傍(わき)の柱に附着(くっつ)いて胡坐(あぐら)でさ。妙に人相 形体(ぎょうてい)の変ったのが、三つとも、柱の処ですからね。私も今しがた敷居際の、仕切の壁の角を、摺出(ずりだ)した処ですよ。

どうです、心得ているから可(い)いようなものの、それでいながら変に凄(すご)い。気の弱い方が、転寝(うたたね)からふっと覚際(さめぎわ)に、ひょっと一目見たら、吃驚(びっくり)しますぜ。

魔物もやっぱり、蛇や蜘蛛(くも)なんぞのように、鴨居(かもい)から柱を伝って入って来ると見えますな。）

（可厭（いや）ですね。）

婦人は二人、颯（さっ）と衣紋（えもん）を捌（さば）いて、櫺子窓（れんじまど）の前を離れた、そこにも柱があったから。

そして、お蘭さんが、

（ああ、また……開（あ）いていますね。）

と言うんだ。……階下（した）から二階へ帰掛けに、何の茶番が！　で、私がぴったり閉めた筈（はず）。その時は勿論、婆々も爺々も見えなかった、――その物干の窓が、今の間に、すかり、とこう、切放したように、黒雲立って開（あ）いている。

お種さんが、

（憚（はばか）り様、どうかそこをお閉め下さいまし。）

こう言って声を懸けた。――誰か次の室（ま）の、その窓際に坐っているのが見えたんだろう。

お聞き……そうすると……壁腰、――幹事の沢岡が気にして摺退（すりの）いたという、敷居外の柱の根の処で、

（な、）

と云う声だ！　私は氷を浴びたように悚然（ぞっ）とした。

（閉（しめ）い言うて、云わしゃれても、な、埒明（らちあ）かん。閉めれば、その跡から開けるで、やいの。）

聞くと、筋も身を引釣（ひッつ）った、私は。日暮に谷中の坂で聞いた、と同じじゃないか。もっとも、年寄りは

誰某（だれそれ）と人を極（き）めないと、どの声も似てはいるが。

それに、言い方が、いかにも邪慳（じゃけん）に、意地悪く聞えたせいか、幹事が、対手（あいて）は知らず、ちょっと詰（なじ）るように、

(誰が明けます。)

(誰や知らん。)

(はあ、閉める障子を明ける人がありますか。)

(棺の蓋（ふた）は一度じゃが、な、障子は幾度（いくたび）でも開けられる、閉（た）てられるがいの。)

(可（い）いから、閉めて下さい、夜が更けて冷えるんですから。)と幹事も不機嫌な調子で言う。

（惜(お)きましょ。透通いて見えん事は無けれどもよ……障子越は目に雲霧じゃや、覗(のぞ)くにはっきりとよう見えんがいの。）

（誰か、物干から覗くんですかね。）

（彼(かれ)にも誰(たれ)にも、大勢、な、）

（大勢、……誰です、誰です。）

と、幹事もはじめて、こう逆に捻向(ねじむ)いて背後(うしろ)を見た。

（誰や言うてもな、殿、殿たちには分らぬ、やいの、形も影も、暗い、暗い、暗い、見えぬぞ、殿。）

（明るくしよう、）

と幹事も何か急込(せきこ)んで、

（三輪ちゃん、電燈を、電燈を、）

と云ったが、どうして、あの娘が動き得ますか。私の膝に、可哀相に、襟を冷たくして突臥したッきり。

「措きませ、措きませい。無駄な事よ、殿、地獄の火でも呼ばぬ事には、明るくしてかて、殿たちの目に、何が見えよう。……見えたら異事じゃぞよ、異事じゃぞよ、の。見えぬで僥倖いの、……一目見たら、やあ、殿、殿たちどうなろうと思わさる。やあ、）

と口を、ふわふわと開けるかして、声が茫とする。」

二十三

「幹事が屹(きっ)として、

（誰です、お前さんは、）

と聞いた。この時、睡(ねむ)っていない人が一人でもある

とすれば、これは、私はじめ待構えた問(とい)だった。

（私(わし)か、私か、……殿、）

と聞返して、

（同じ仲間のものじゃが、やいの。）

（夥間(なかま)？　私たちの？）

（誰がや、……誰がや、）

と嘲(あざけ)るように二度言って、

（殿たちの。私（わし）が言うは近間に居る、大勢の、の、その夥間じゃ、という事いの。）

（何かね、廓（くるわ）の人かね。）

（されば、松の森、杉の林、山懐（やまふところ）の廓のものじゃ。）

（どこから来ました。）

（今日は谷中の下闇（したやみ）から、）

（佐川さん、）

と少し声高に、幹事が私を呼ぶじゃないか。

私は黙っていたんだ。

しばらくして、

（何をしに……）

（「とりあげ」をしようために、な、殿、「とりあげ」に来たぞ、やいの。）

（嬰児（あかんぼ）を産ませるのか。）

（今、無い、ちょうど間に合うて「とりあげ」る小児（こども）は無い。）

（そんな、誂（あつら）えた［＃「誂えた」は底本では「誹えた」］ようなお産があるものか、お前さん、頼まれて来たんじゃ無いのかね。）

（さればのう、頼まれても来たれど、な、催促にももう来たがいの。来たれどもの、仔細（しさい）あってまだ「とりあげ」られぬ。）

（むむ、まだ産れないのか。）

（何がいの、まだ、死にさらさぬ。）

（死……死なぬとは？）

（京への、京へ、遠くへ行ている、弟和郎（わろ）に、一目（ひとめ）未練が残るげな。）

幹事はハタと口をつぐんだ。

（そこでじゃがや、姉（あね）めが乳の下の鳩落（みずおち）な、蝮指（まむしゆび）の蒼（あお）い爪で、ぎりぎりと錐（きり）を揉（も）んで、白い手足をもがもがと、黒髪を煽（あお）って悶（もだ）えるのを見て、鳥ならば活（い）きながら、羽毛（けば）を挘（むし）った処よの。さて、それだけで帰りがけじゃい、の、殿、その帰るさに、これへ寄った。）

（そこに居るのは誰だ。）

と向うの縁側の処から、子爵が声を懸けた。……私たちは、フト千騎の味方を得たように思う。

ト此方(こなた)で澄まして、

（誰でも無いがの。）

（いや、誰でも構わん。が、洒落(しゃれ)も串戯(じょうだん)も可加減(いいかげん)にした方が可(い)いと思う。こう言うと大人気ないが、婦人も居てだ。土地っ児(こ)の娘も聞いてる……一座をすれば我々の連中だ。悪戯(いたずら)も可(い)いが、余り言う事が残酷過ぎる。……外の事じゃない。

弟を愛して、――それが出来得る事でも出来ない事

でも、その身代りに死ぬと云って覚悟をしている大病人。現に、夜伽（よとぎ）をして、あの通り、灯（あかり）がそこに見えるじゃないか。

それこそ、何にも知らぬ事だ。ちっとも差支えは無いようなものの、あわれなその婦（おんな）を、直ぐ向うに苦しませておいて、呑気（のんき）そうに、夜通しのこの会さえ、何だか心ないような気がして、私なんぞは鬱（ふさ）いでいるんだ。

仕様もあろうのに、その病人を材料（たね）にして、約束の生命（いのち）を「とりあげ」に来たが、一目弟を見たがるから猶予をした、胸に爪を立てて苦しませたとはどうだ。

聞いちゃおられん、余(あんま)り残酷で。可加減(いいかげん)にしておきなさい。誰だか。）

と凜々(りんりん)と云う。

聞きも果てずに、

（酷(むご)いとは、酷いとは何じゃ、の、何がや、向うの縁側のその殿、酷いとはいの、やいの、酷いとはいの。）

と畳掛けるように、しかも平気な様子。――向うの縁側のその殿――とは言種(いいぐさ)がどうだい。」

二十四

「子爵が屹となって、坐り直った様だっけ。
(知らんか、残酷という事を、知らなけりゃ聞かせようじゃないか、前へ出ないか、おい、こっちへ入らんか。)
(行こうのう、殿、その傍へ参ろうじゃがの、そこに汚穢いものがあろうがや。早やそれが、汚穢うて汚穢うてならぬ。……退けてくされませ、殿、)と言うんだ。
(汚いもの、何がある。)
(小丼に入れた、青梅の紫蘇巻じゃ。や、香もならぬ、ふっふっ。ええ、胸悪やの、先刻にから。……早く退けしゃらぬと、私も嘔吐そう、嘔吐そう、殿。)

茶うけに出ていた甘露梅の事だ。何か、女児（おんなご）も十二三でなければ手に掛けないという、その清浄（しょうじょう）な梅漬を、汚穢くてならぬ、嘔吐すと云う。

（吐きたければ吐け、何だ。）

（二寸の蚯蚓（みみず）、三寸の蛇、ぞろぞろと嘔吐すが怪（け）しゅうないか。）

余り言種（いいぐさ）が自棄（やけ）だから、

（蛇や蚯蚓は構わんが、そこらで食って来た饂飩（うどん）なんか吐かれては恐縮だ。悪い酒を呷（あお）ったろう。佐川さん、そこらにあったら片附けておやんなさい。）

私は密（そっ）と押遣（おしや）って、お三輪と一所に婦人だちを背後（うしろ）

へ庇(かば)って、座を開く、と幹事も退(の)いて、私に並んで楯(たて)になる。

次の間かけて、敷居の片隅、大きな畳の穴が開いた。そこを……もくもく、鼠に茶色がかった朦朧(もうろう)とした形が、フッ、と出て、浮いて、通った。——

どうやら、臀(しり)から前(さき)へ、背後(うしろ)向きに入るらしい。ト前へ被(かぶ)さった筈(はず)だけれども、琴の師匠の裸の腹はやっぱり見えた。縁側の柱の元へ、音もなく、子爵に並んだ、と見ると、……気のせいだろう、物干の窓は、ワヤワヤと気勢(けはい)立って、奴(やっ)が今居るあたりまで、ものの推込(おしこ)んだ様子がある。なぜか、向うの、その三階の

蚊帳が、空へずッと高くなったように思う。
ちょうど、子爵とその婆（ばばあ）との間に挟まる、柱に凭（もた）れた横顔が婦人（おんな）に見える西洋画家は、フイと立って、真暗（まっくら）な座敷の隅へ姿を消した。真個（しん）に寐入っていたのでは無かったらしい。
（残酷というのはね、仮にもしろ、そんな、優しい、可憐（いじらし）い、——弟のために身代りになるというような、若い人の生命（いのち）を「とりあげ」に来たなどという事なんだ。世の中には、随分、娑婆塞（しゃばふさ）げな、死損（しにぞこな）いな、）
と子爵も間近に、よくその婆々（ばばあ）を認めたろう、……当てるように、そう言って、

（邪魔な生命もあるもんだ。そんな奴の胸に爪を立てる方がまだしもだな。）

（その様な生命はの、殿、殿たちの方で言うげな、……病ほうけた牛、痩せさらぼえた馬で、私等がにも役にも立たぬ。……あわれな、というはの、膏の乗った肉じゃ、いとしいというはの、薫の良い血じゃぞや。な、殿。——此方衆、鳥を殺さしゃるに、親子の恩愛を思わっしゃるか。獣を殺しますに、兄弟の、身代りの見境があるかいの。魚も虫も同様での。親があるやら、一粒種やら、可愛いの、いとしいの、分隔てをめされますかの。

弱いものいうたら、しみしんしゃくもさしゃらず……毛を毟（むし）る、腹を抜く、背を刳（ひら）く……串刺（くしざし）じゃ、ししびしおじゃ。油で煮る、火炎（ほのお）で焼く、活（い）きながら鱠（なます）にも刻むげなの、やぁ、殿。……餓（ひも）じくばまだしもよ、栄耀（えよう）ぐいの味醂蒸（みりんむし）じゃ。

馴（な）れれば、ものよ、何がそれを、酷（ひど）いとも、いとしいとも、不便（ふびん）なとも思わず。——一ツでも繋（つな）げる生命（いのち）を、二羽も三頭（みッつ）も、飽くまでめさる。また食おうとさしゃる。

誰もそれを咎（とが）めはせまい。咎めたとて聞えまい、私（わし）も言わぬ、私もそれを酷（むご）いと言わぬぞ。知らぬから

じゃ、不便(ふびん)もいとしいも知らねばこそいの。——何と、殿、酷(むご)い事を知らぬものは、何と殿、殿たちにも結構に、重宝にあろうが、やいの、のう、殿。）
（何とでも言え、対手(あいて)にもならん。それでも何か、そういうものは人間か。）
と吐出すように子爵が言った。」

二十五

「卜其奴(そいつ)が薄笑いをしたようで、
（何じゃ、や、人間らしく無いと言うか。誰が人間に

なろうと云うた。殿たち、人間がさほど豪(えら)いか、へ、へ、へ、)

　とさげすんで、

(この世のなかはの、人間ばかりのもので無い。私等(わしら)が国はの、——殿、殿たちが、目の及ばぬ処、耳に聞えぬ処、心の通わぬ処、——広大な国じゃぞの。

　殿たちの空を飛ぶ鳥は、私等(わしら)が足の下を這廻(はいまわ)る、水底(みなそこ)の魚(うお)が天翔(あまか)ける。……烏帽子(えぼし)を被(かぶ)った鼠、素袍(すおう)を着た猿、帳面つける狐も居る、竈(かまど)を炊(お)く犬も居る、鼬(いたち)が米舂(こめつ)く、蚯蚓(みみず)が歌う、蛇が踊る、……や、面白い世界じゃというて、殿たちがものとは較べられぬ。

何——不自由とは思わねども、ただのう、殿たち、人間が無いに困って、時々来ては攫(さら)えて行(ゆ)く……老若男女(ろうにゃくなんにょ)の区別は無い。釣針にかかった勝負じゃ、緑の髪も、白髪(しらが)も、顔はいろいろの木偶(でく)の坊。孫等(まごども)に人形の土産じゃがの、や、殿。殿たち人間の人形は、私等が国の玩弄物(おもちゃ)じゃがの。

身代りになる美(よ)い婦(おんな)なぞは、白衣(びゃくえ)を着せて雛(ひな)にしょう。芋殻(いもがら)の柱で突立(つった)たせて、やの、数珠(じゅず)の玉を胸に掛けさせ、）

いや、もう聞くに堪えん。

（まあ、面を取れ、真面目(まじめ)に話す。）と子爵が憤ったよ

うに言う。
（面、）
（面だ。）
面だ、面だ、と囁く声が、そここに、ひそひそ聞えた。眠らずにいた連中には、残らず面に見えたらしい。
成程、そう言えば、端近へ出てから、例の灯の映る、その扁平い、むくんだ、が瓜核といった顔は、蒼黄色に、すべすべと、皺が無く、艶があって、皮一重曇った硝子のように透通って、目が穴に、窪んで、掘って、眉が無い。そして、唇の色が黒い。気が着くと、もの

を云う時も、奴、薄笑をする時も、さながら彫刻けたもののようで静としたツきり、口も頬もビクとも動かぬ。眉……眉はぬっぺりとして跡も無い、そして、手拭を畳んだらしいものを、額下りに、べたん、と頭へ載せているんだ。

（いや、いや、）

と目鼻の動かぬ首を振って、

（除るまい、除らぬは慈悲じゃ。この中には、な、画を描き彫刻をする人もある、その美しいものは、私等が国から、遠く指す花盛じゃ、散らすは惜しいに因って、わざと除らぬぞ！……何が、気の弱い此方たちが、

こうして人間の面を被っておればこそ、の、私が顔を暴露いたら、さて、一堪りものう、髯が生えた玩弄物に化ろうが。)

(灯を点けよう、何しろ。)

と、幹事が今は蹌踉けながら手探りで立とうとする。

子爵が留めて、

(お待ちなさい。串戯も嵩じると、抜差しが出来なくなる。誰か知らんが、悪戯がちと過ぎます。面は内証で取るが可い、今の内ならちっとも分らん、電燈を点けてからは消え憎くなるだろう。)

子爵はどこまでも茶番だ、と信ずるらしい。

……後で聞くと、中には、対方（あいて）を拵（こしら）えて応答（うけこたえ）をする、子爵その人が、悪戯をしているんだ、と思ったのもあったんだ。

（明るさ、暗さの差別は無いが、の、の、殿、私（わし）がしょう事、それをせねば、日が出ましても消えはせぬが。）

（可（よし）、何をしに来たんだ、ここへ。……まあ、仮にそっちが言う通りのものだとすると。）

（されば、さればの、殿。……）

とまた落着いたように、ぐたりと胸を折った、蹲（うずくま）った形が挫（ひしゃ）げて見えて、

（身代りが、――その儀（こと）で、やいの、の、殿、まだ「と

りあげ」が出来ぬに因って、一つな、このあたりで、間に合わせに、奪ろう！……さて、どれにしようぞ、と思うて見入って、視め廻いていたがやいの、のう、殿。）

皆、――黙った。

（殿、ふと気紛れて出て、思懸のう懇申した験じゃ、の、殿、望ましいは婦人どもじゃ、何と上臈を奪ろうかの。）

婦人たちのその時の様子は、察して可かろう。」

二十六

「奴(やつ)は勝ほこった体(てい)で、毛筋も動かぬその硝子面(ビイドロめん)を、穴蔵の底に光る朽木のように、仇艶(あだつや)を放って眴(みまわ)しながら、

（な、けれども、殿、殿たちは上臈(じょうろう)を庇(かば)わしゃろうで、懇(ねんごろ)申した効(かい)に、たってとはよう言わぬ。選まっしゃれ、選んで指さっしゃれ、それを奪(と)ろう。……奪ろう。……それを奪ろう！　やいの、殿。）

と捲(まく)し掛けて、

（ここには見えぬ、なれども、殿たちの妻、子、親、縁者、奴婢(しもべはした)、指さっしゃれば、たちどころに奪って

見しょう。）

と言語道断な事を。

とはたはたと廂の幕が揺動いて、そのなぐれが、向う三階の蚊帳を煽った、その時、雨を持った風が颯と吹いた。

（また……我を、と名告らっしゃれ……殿、殿ならば殿を奪ろう。）

（勝手にしろ、馬鹿な。）

と唾吐くように、忌々しそうに打棄って、子爵は、くるりと戸外を向いた。

（随意にしようでは気迷うぞいの、はて？……）

とその面はつけたりで、畳込んだ腹の底で声が出る。

(さて……どれもどれも好ましい。やあ、天井、屋の棟にのさばる和郎等（わろら）！　どれが望みじゃ。やいの、)

と心持仰向くと、不意に何と……がらがら、どど、がッと鼠か鼬（いたち）だろう、蛇も交（まじ）るか、凄（すさま）じく次の室（ま）を駆けて荒廻ると、ばらばらばらばらばらと合せ目を透いて埃（ほこり）が落ちる。

(うむ、や、和郎等（わろども）。埃を浴びせた、その埃のかかったものが欲（ほし）いと言うかの――望みかいの。)

ばたばた、はらはらと、さあ、情（なさけ）ない、口惜（くやし）いが、袖や袂（たもと）を払（はた）いた音。

（やれ羽打つ、へへへ、小鳥のように羽掻を煽つ、雑魚のように刎ねる、へへ。……さて、騒ぐまい、今がはそで無い。そうでは無いげじゃ。どの玩弄物欲しい、と私が問うたでの、前へ悦喜の雀躍じゃ、……這奴等、騒ぐまい、まだ早い。殿たち名告らずば、やがて、選ろう、選取りに私が選って奪ろう！）

（勝手にして、早く退座をなさい、余りといえば怪しからん。無礼だ、引取れ。）

と子爵が喝した、叱ったんだ。

（催促をせずと可うござる。）

と澄まし返って、いかにも年寄くさく口の裡で言っ

た、と思うと、

（やあ、）

と不意に調子を上げた。ものを呼びつけたようだっけ。幽に一つ、カアと聞えて、またたく間に、水道尻から三ツのその灯の上へかけて、棟近い処で、二三羽、四五羽、烏が啼いた、可厭な声だ。

（カアカアカアカア――）

と婆々が遣ったが、嘴も尖ったか、と思う、その黒い唇から、正真の烏の声を出して、

（カアカア来しゃれえ！　火の車で。）

と喚く、トタンに、吉原八町、寂として、廓の、地

の、真中の底から、ただ一ツ、カラカラと湧上ったような車の音。陰々と響いて、――あけ方早帰りの客かも知れぬ――空へ舞上ったように思うと、凄い音がして、ばッさりと何か物干の上へ落ちた。

（何だ！）

と言うと、猛然として、ずんと立って、堪えられぬ……で、地響で、琴の師匠がずかずかと行って、物干を覗いたっけ。

裸脱ぎの背に汗を垂々と流したのが、灯で幽に、首を暗夜へ突込むようにして、

（おお、稲妻が天王寺の森を走る、……何じゃ、これ

は、烏の死骸をどうするんじゃい。）と引掴（ひッつか）んで来て、
しかも癪（しゃく）に障った様子で、婆々（ばばあ）の前へ敲（たた）きつけた。

あ、弱った。……

その臭気といったらない。

皆（みんな）、ただ呼吸（いき）を詰めた。

婆々が、ずらずらとその蛆（うじ）の出そうな烏の死骸を、膝の前へ、蒼（あお）い頤（おとがい）の下へ引附けた。」

二十七

「で、頭（ず）を下げて、熟（じっ）と見ながら、

（蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ。一つ腸の中を出され、ボーンと。――やあ、殿、上臈たち、私がの、今ここを引取るついでに、蒼蠅を一ツ申そう。ボーンと飛んで、額、頸首、背、手足、殿たちの身体にボーンと留まる、それを所望じゃ。物干へ抜いて、大空へ奪って帰ろう。名告らしゃれ。蠅がたからば名告らしゃれ。名告らぬと卑怯なぞ。人間は卑怯なものと思うぞよ。笑うぞよ……可いか、蒼蠅を忘れまい。

蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ、ボーンと出され、おじゃった！　おお！）

一座残らず、残念ながら動揺めいた。

トふわりと起（た）ったが、その鳥の死骸をぶら下げ、言おうようの無い悪臭を放って、一寸、二寸、一尺ずつ、ずるずると引いた裾（すそ）が、長く畳を摺（す）ったと思うと、はらりと触ったかして、燭台（しょくだい）が、ばったり倒れた。

その時、捻向（ねじむ）いて、くなくなと首を垂れると、摺（ず）った後棲（うしろづま）を、あの真黒（まっくろ）な嘴（くちばし）で、ぐい、と啣（くわ）えて上げた、と思え。……鳥のような、獣のような異体（いてい）な黄色い脚を、ぬい、と端折（はしょ）った、傍若無人で。

（ボーン、ボーン、ボーン、）と云うのが、ねばねばと、重っくるしく、納豆の糸を引くように、そして、点々（ぽちぽち）と切れて、蒼蠅の羽音やら、奴（やつ）の声やら分らぬ。

そのまま、ふわりとして、翻然（ひらり）と上（あが）った。物干の暗黒（やみ）へ影も隠れる。

（あれ。）

と真前（まっさき）に言ったはお三輪で。

（わっ）とまた言った人がある。

さあ、膝で摺（ず）る、足で退（の）く、ばたばたと二階の口まで駆出したが、

（ええ）と引返（ひっかえ）したは誰だっけ。……蠅が背後（うしろ）から縋（すが）ったらしい。

　物干から、

（やあ、小鳥のように羽打つ、雑魚（ざこ）のように刎（は）ねる。

はて、笑止じゃの。名告(なの)れ、名告らぬか、さても卑怯な。やいの、殿たち。上臈たち。へへへ、人間ども。ボーン、ボーン、ボーン、あれ、それそれ転ぶわ、踣(の)めるわ、這(は)うわ。とまったか、たかったか。誰じゃ、名告れ、名告らぬか、名告れ。……ボーン、）
と云う時、稲妻が閃(ひら)めいて、遠い山を見るように天王寺の森が映った。

皆ただ、蠅の音がただ、雷(はたたがみ)のように人々の耳に響いた。

ただ一縮みになった時、

（ほう、）

と心着いたように、物干のその声が、
（京から人が帰ったような。早や夜もしらむ。さらば、身代りの婦を奪ろう！……も一つ他にもある。両の袂で持重ろう。あとは背負うても、抱いても荷じゃ。やあ、殿、上臈たち、此方衆にはただ遊うだじゃいの。道すがら懇申した戯じゃ。安堵さっしゃれ、蠅は掌へ、ハタと摑んだ。

さるにても卑怯なの、は、は、は、梅干で朝の茶まいれ、さらばじゃ。）

ぱっと屋上を飛ぶ音がした。

フッと見ると、夜が白んで、浅葱になった向うの

蚊帳(かや)へ、大きな影がさしたっけ。けたたましい悲鳴が聞えて、白地の浴衣を、扱帯(しごき)も蹴出(けだ)しも、だらだらと血だらけの婦(おんな)の姿が、蚊帳の目が裂けて出る、と行燈(あんどう)が真赤(まっか)になって、蒼い細い顔が、黒髪(かみ)を被(かぶ)りながら黒雲の中へ、ばったり倒れた。

ト車軸を流す雨になる。

電燈が点(つ)いたが、もうその色は白かった。

婆々(ばばあ)の言った、両の袂の一つであろう、無理心中で女郎が一人。——

戸を開ける音、閉める音。人影が燈籠(とうろう)のように、三階で立騒いだ。

照吉は……」

と民弥は言って、愁然(しゅうぜん)とすると、梅次も察して、ほろりと泣く。

「ああ、その弟ばかりじゃない、皆(みんな)の身代りになってくれたように思う。」

明治四十四(一九一一)年三月

底本：「泉鏡花集成４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年10月24日第1刷発行
　　　２００４（平成16）年３月20日第２刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十三巻」岩波書店
　　１９４１（昭和16）年６月30日発行
※誤植の確認には底本の親本を参照しました。
入力：土屋隆
校正：門田裕志
２００６年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。